

次 目

聖訓摘要	本多日生
日蓮宗概観(其十)	故梶本多日生
開目鈔講話(第十二講)	小林一郎
日支事變と宗教運動	磯部滿事
立正安國の理想と日本精神	守屋貫教
鎌倉の奥津城二つ	笹木欣爾
記事	
○本部週報	
○編纂室より	
大藏經要義續篇(其七)	本多日生

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝ナル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守ン進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲シ 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團畧則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

松野殿後家尼御返事

本多日生

我等衆生の三界六道に輪回せし事は、或は天に生れ或は人に生れ或は地獄に生れ或は餓鬼に生れ畜生に生れ、無量の國に生を受けて無邊の苦しみを受けてたのしみにあひしかども、一度も法華經の國に生せず、たまたま生れたりといへども南無妙法蓮華經と唱へず、唱ふる事は夢にも無し、人の申すをも聞かず。佛のたとへを説かせ給ふに、一眼の龜の浮木の穴に値ひがたきにたとへ給ふなり。

(編纂遺文録一八三四)

この御教訓は佛教信仰の根本觀念ともいふべき事であつて、何處にもあるお言葉であります。さうして茲には「一眼の龜の浮木の穴に値ひ難きにたとへ給ふなり」といふ事に就いて、その譬への意味を非常に詳しく次にお書きになつて居る、その譬へが如何にも親切に出來て居るので、この御文章を抽出した次第であります。

何故これが一般の佛教信仰の原則になつて居るかというのと、この御文章にある通り、人間に生れて来て居ること、それはどういふものかといふ考であり、佛敎の思想では、無論吾々の魂は生れかはり死にかはり流轉を辿つて居る所のものである。或は天上界にも生れ、或は餓鬼、畜生にも生れるといふ風に、六道の流轉を辿つて居るものである。何時この命が始つたといふことは無い、業の力に依つてこれが廻り廻つていくものである。併しその中に於て、人間に生れて居るといふことは、非常に難しい事だといふことが判るのであります。人間より下の修羅、畜生、餓鬼、地獄といふ四つは、非常に苦みが多いのでありますから、逆も善い考を起して善根功徳を積むといふことが不可能の生活であり、人間でさへも極く零落れて食ふに困るとか、その他いろ／＼心配が重なつて苦勞のみ多くなつた人間は、中々向上し難くなつてしまふものであります。況してやそれより以下の修羅の境界であれば、何時も何時も腹を立てるやうな事ばかりに逐はれて居る譯である、畜生に成つて考へてもさうであり、蛇に生れやうが蛙に生れやうが、到底善根といふやうな方へは行くものではない、彼が生産は何をして暮すかといへば、蛇に生れた所が蚯蚓を喰つたり蛙を喰つたりするやうなことは、彼が生産は何をして成つた所が蜻蛉を喰つたり蚊を喰つたり、そんな事ばかりやつて居るのであつて、決して善根を積んで彼が向上して、「あの蛙はこの次には人間に出て來さうなものだ」といふやうな蛙は、幾ら搜して廻つてもありはしない。だからモウ一たび人間以下の生活に墮ちたら、永遠にモウ浮ぶことの出來ないものと

いふことになると思ひます、所謂暗きより暗きに進んで、底無し沼に沈み込む一方であると思ふ、これは戲談ごとではないといふことが考へられる。佛陀の敎を正しく信解した場合には、この人間の果報を一つ踏み外したならば、地獄まで行かぬにしても、その隣の修羅まで行つても、最早やこれは永遠の絶望である、實に恐るべき事だといふことが判つて來る。それでは人間より以上の天上界はこれは上等かと思つと、佛の敎に依れば、これは決して望むべき所でないであります、天上界は快樂の世界になつて居るけれども、その面白いといふ事の爲に、又善心が起らぬといふことになつて居る。これは人間の精神から標準を取つて考へても判ることであり、餘りに幸福な境涯に生れて居る人、金も澤山ある、名譽もあるといふやうな事になつて行くと、段々人間といふものは情け根性が起つて來るものである。これは佛様はあらゆるお經に説いて居られますが、基督もさういふ事を言つて居る、「富み且つ榮える者が天國に入るのは、肥つた豚が針の目度を通るよりも尙ほ難し」と言つて居る、瘦せた豚でも針の目度は通れない、それが肥つた豚が針の目度を通るといふことはどんな事をして無い苦である。さういふ關係で、人間でも餘り幸運である所の人間は、決して宗教心も起らず善心も起らない、大體は腐敗をするものである。そこで人間よりモウ一つ上の天上界に行けば、總ての人が左様に同情心といふものも何も無く、皆が浮れて楽しんで居る境界ばかりである、唯だ快樂を逐うて時間の經つのも知らずに暮して居る。その内に果報が盡きてしまふものであるから、さうすると今度は引續り返つて淺間し

い境界に墮るといふことになる。そこで人間はその中間にあつて、苦みもあるが其處に餘裕もある、さうしてそこに善心を起すことの出来る境界にあるから、洵にこれは有望な生活であるといふことを佛様はお説きになつたのであります。吾等は幸に人間に今生れて來て居るのであるから、茲で天上界や餓鬼界の眞似をやつて居つてはいかぬ、人間は最も善き考を撰んで善根功徳を積んで、之れを根據として大向上を遂げて、完全なる佛様まで行つてしまはなければならぬといふ事をお説きになつて居るのであります。

そこでさう成らうとするには自分の力だけではいけないから、善き教があつてさうして吾が心を導いて貰ふ。吾が足らざる所を補うて貰ふ所の結構な教、即ち佛教といふものが要るのである。その中に於ても撰び擇んで行けば法華經である、法華經をモウ一つ撰べば之れを信仰に移して簡單な南無妙法蓮華經と唱へることに依つて萬事成就するといふことになるから、そこでこれを一眼の龜の譬喩に合せて説明をせられたので、三千年も海の底に沈んで居る所の龜が漸く波の上に乗つて來る、この龜は眠り龜であつて、一と眠り三千年といふやうに寝て居る、それが眼があいて「一つ上に出て見やうか」と思ふ時には三千年を経過して居る、それで漸く海の上に出て來た所が、その龜は眼が僻目に出て居るので、物が流れて來るのが眞直に見えない、さうして其處に木が流れて來ても、杉の木や松の木のやうな物では、自分の腹の熱を除るだけの力がない、梅檀香木が流れて來なければ自分の腹の熱を除るこ

とは出來ない、廣い海の上で梅檀香木に出會ふといふことは容易なことではない、假にそれが流れて來たとしても、「あゝ梅檀香木が來たナ」と思つてそれを逐ひかけても、それが反對の方に行くやうに眼が出て來て居るものであるから、右の方に木が流れて來ると思つて泳いで行くと、實際は左の方の木は流れて居るといふやうな譯で、左に泳ぐべきものを右に泳ぐものであるから、折角出會つた梅檀香木も取逃してしまふといふことになる、それから幸にして梅檀香木を捉へてその上に乗ることが出來ても、波荒くして直ぐに捲り落されてしまふ、だからその梅檀の上で自分の腹が丁度坐つて、少々波が捲れても落ちないといふやうな、丁度適當した穴が明いて居らなければならぬ、さういふ梅檀香木でなければ自分の役に立たない、そんな難かしい注文したやうな梅檀の木は、中々流れて來る筈がないぢやないか。それが今法華經に値うてお題目を唱へる者は、三千年に一度龜が海の上に浮いて、さうして梅檀の香木に出會つて、丁度自分の腹を當てる穴があつて、さうして腹の熱は梅檀の木に依つて冷やし、脊中の寒さは太陽の光を受けて温まることが出来得るやうな有様のものである、實に千載一遇といふか、非常な難かしい機會を捉へ得て、この有難き正法に値ひ奉つて居る、この上も無い仕合の境遇に置かれてあるのであるから、之れを捲り落されぬやうに、この信仰の尊さを味はつて行かなければならぬ。之れを遣り損つて修羅界に行き、或は地獄界に行くといふことになれば、永遠に救はれないことになつてしまふのであるから、幸に人間に生れて佛法に値ひ奉り、殊に法華經、南無妙法蓮華經の信仰に近づいた

者は、これ程有難い事はないといふ事をお述べになつて居るのであります。

これは今申す通り佛教一般の思想で、法華經が有難いといふ事は、これは法華宗で言ふのであるけれども、大體人間の境界、之れを空しく過してはいけぬ、人間の生涯は一日一日と時間が経つて行くが、さて最後に至つて一日の命を誰か借して呉れるかといつたならば、誰も借して呉れはしない、如何なる方法を以つても、一日は愚か一時間の命も延長することは出来ない、百萬の財産を積まうが、自分の有つて居る寶全部を提供しやうが、最後十分間の生命をも延長することは出来ないものである。それを惜し氣もなく牡丹餅を食うて欠伸して晝寝をして「あゝ好い氣分ぢや」と言つてこの貴重な時間を空過して、さてこの人間の果報が終つてドサンと落ちかけた時分に「ヤッこれは大變」と言つて虚空を闊んだ所がそれは追ひつかないといふ事、これは實に佛教の中に於て吾々に與へたる大警告である。これに驚かずしては佛教の信者にはなれない、「そんな事は構ふものか」といふやうな事を言つてやり居れば今度は愈々閻魔さんの法廷に引出されて、後手に括られて「コラ貴様」といふことになる。對手が違つて来る、この娑婆世界に於て佛の教に近づく者は、「さういふ場合があつたならば取返しがつかね」といふ反省自覺といふものが起つて、始めて佛教の信仰に來て居る者と謂ふことが出來やうと思ふ。大なる眞理といふものは寧ろ平凡なものだと思ふ。いろ／＼佛教には立入つた教義があるけれども、寧ろこのお爺さんでもお婆さんでも知つて居るこれが非常に大事なことである。そこを十分に心得ないで一念三

千の法門がどうぢやとか、或は眞如、因果がどうぢやとかいふて見た所が駄目だらうと思ふ、寧ろこの人生を空しく送つてはならないといふ、誰も知つて居る事柄に於て深く信解して、そこに熱誠なる決心が起らなければいくまいと私は考へて居るのであります。

御注意

聖訓摘要は「聖訓要義」には全然相違せるものに

有之、未だ出版されたること無御座候に付、豫

め御諒承相成度此段念告仕候

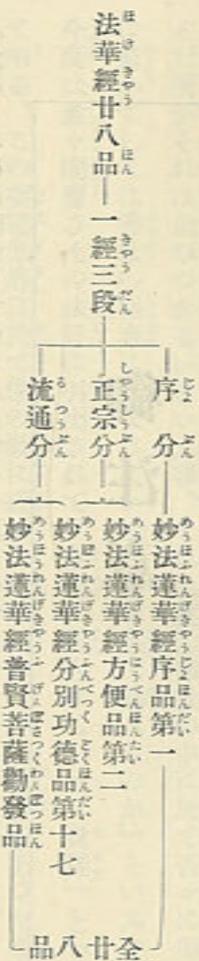
日蓮宗概観 (其十)

故 梶 木 顯 正

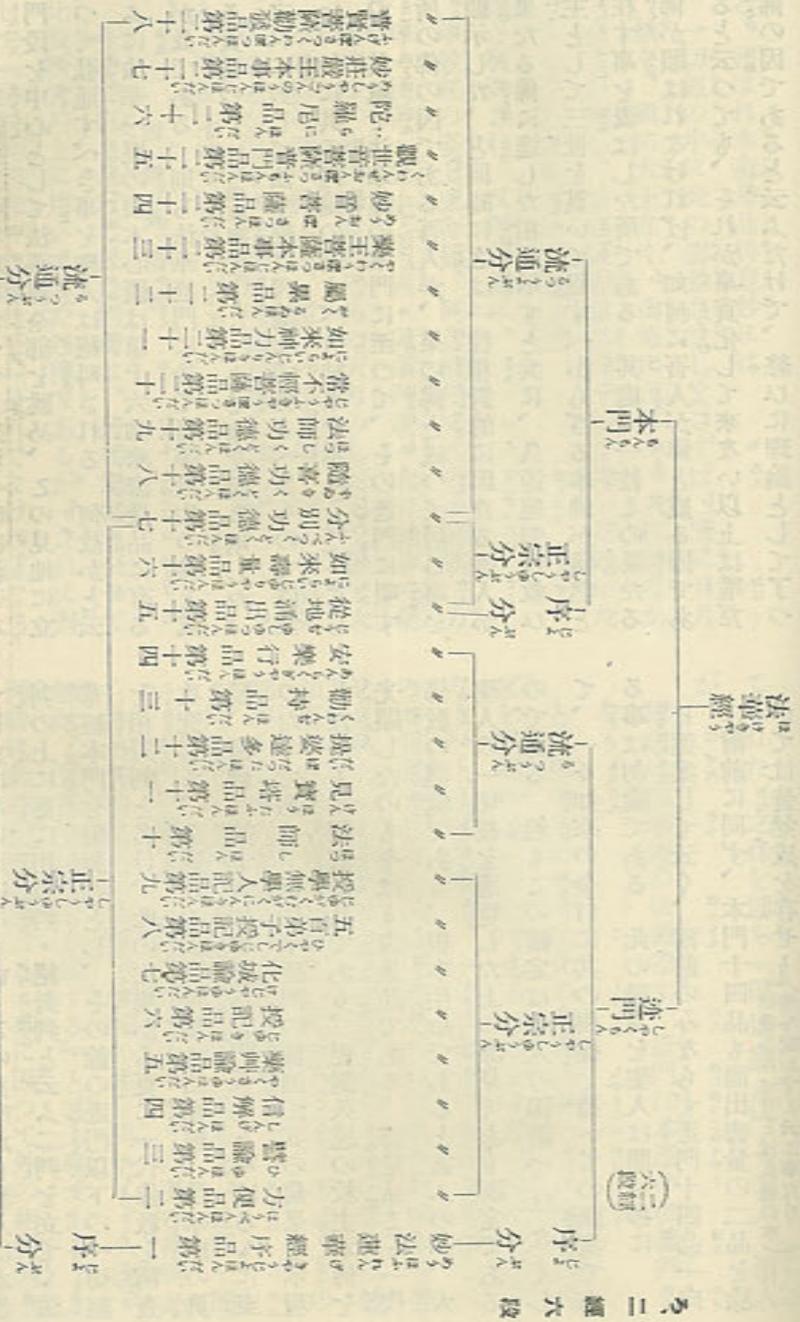
い、一經三段

一經三段とは、法華經廿八品を三分して、妙法蓮華經序品第一を「序分」とし、方便品第二より第十七分別功德品の「以助無上心」迄の前半即ち通し

て十五日即半を「正宗分」(正宗分とは本論)と言ひ、分別功德品の「爾時佛語彌勒菩薩」より以下、廿八品の終り「作禮而去」まで通じて十一品半を「流通分」(流通文とは結)と名く。(論と云ふに同じ)と名く。



注意 (一) 序分とは——正に説かんとする端を啓く。
 (二) 正宗分とは——當機の衆生に對して正しく教を説き興す。
 (三) 流通分とは——後世流布して利益を得さしめる事を明す。



この二經六段の判釋に依つて、末法今時は法華本門段を中心として法華經全部を眺め、この見地に立つて弘通すべき事を聖人は絶叫される。何故かと云ふに法華一經の根本心髓は第十六如來壽量品に有るが故である。則ち法華迹門に於て吾等衆生の佛と成る資格の(當然佛と成らなければならぬ)ある事を説き明した。之れに對して法華經は理論丈で終るべきものではない。故に其の理論の達すべき結果を示さねばならぬ。其處で法華經の本門に至つて、その迹門に明す所の佛の因である吾人が、果の佛と成つて居る事を顯示した、と同時に之は一往相對的に因たる吾人が果たる佛に達した相を示すと共に、久遠絶對の救ひ主として三世を貫いて犯すべからざる本佛が儼然と在す事を表はした所である。其處で一往この果たる佛が顯はれなければ、如何に吾人が佛と成る因であると云つても、それが事實化して來ない以上は唯だ佛の因であると云ふだけで、終ひに理論として了つ

てしまはなければならぬ。この意味から聖人は本迹判の上に更に相對判・絶對判と云ふ二判を立て、法華經本門を絶對判とし、その餘の迹門以下の一切經を相對判と名け、此の立場から更に一代佛敎を精査攻究して、全佛敎の眼目骨髄は法華經、法華經の眞髓、精神は第十六如來壽量品なりと呼ぼるゝに至つたのである。今法華迹門の佛因が其の佛果を實現したのも本門壽量品であり、絶對久遠の教主本佛を光顯したのもやはり壽量品である。壽量品こそ一代佛敎の魂魄であり、根本生命であると言ふのが、大聖人の一切經を通覽した上の識見であり斷定であるのである。然もこの斷定は聖人の獨斷ではなくして、一々如來の金口に其の根據を措いての斷案である事は勿論である。此の識見を聖人は開目抄に日蓮案じて云く、爾前のみならず迹門十四品一向に爾前に同ず、本門十四品も涌出壽量の二品を除いては皆始成を存せり(始我を存せりとは久遠の本佛を説かすすと云ふ事なり)

と、言はれ亦壽量品得意抄には

一切經の中に此の壽量品をしまさずば、天に日月無く、國に大王なく、山海に玉なく、人に神なくらんが如し、されば壽量品なくしては一切經いたづらごととなるべし。(通文錄 六七〇)

等と發表され、又開目抄に、
華嚴經の臺上盧舍那、阿含經の丈六の小釋迦、方等・般若・金光明經・阿彌陀經・大日經等の權佛等は、此の壽量品の佛の天月のしばらく影を大の器に浮べ給ふを、諸宗の學者等、近くは自宗にまで遠くは法華經の壽量品を知らずと、喝破されて居る。

四、開迹顯本

今まで以上擧げて來た判釋は、皆相對判と云つて比較研究の上に用いて來た判釋であるが、之れに對して「絶對的判釋」と云つて、「是れでなければならぬ」と主張する一番最後の判定を與へる判釋を樹

てられた。之れを即ち「開迹顯本」と云ふ、聖人が

爾前は法華經の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。
と、仰せられるのは此の判釋に基いての絶對的判定を宣明せられた文である。則ち「法華經は絶對善なり」との御言葉は、一つは如來の金言に準據してのお言葉で有ると共に、復た一面は此の判釋から仰せられたるお言葉であつたのである。今「末法は妙法蓮華經でなければ救はれない」と云ふのは、この判釋から來た見地を示すものである。

其處で此の判釋を表面文上から見ると「迹門を開いて本門を顯す」と云ふ事であるが、内面の精神から考へてゆくと「有限、生滅の佛を開いて、久遠、無始、實在の本佛を光顯する」と言ふ事である。と同時に此の判釋の顯はるゝ事に因つて外の相對判上に論ぜらるゝ諸經は、各々其の立場々々に持つて居

る所の價值を發揮し活躍して來るのである、そのことを聖人は

記の九に云く、本門顯はれ竟れば則ち二種俱に(二種とは二乘即ち人間の成佛するを云ふ事と云ふ)實なり文此の釋の意は本門未だ顯はれざる以前は、本門に對すれば猶進門を以て虛(虚とは眞實に對す)となす。若し本門顯はれ竟れば進門の佛因則ち本門の佛果なるが故に、天月水月本有の法となつて本迹俱に三世常住と顯はるゝなり(果抄)

と、説き王へり。故に法華本門の絶對的教判から壽量品の精神眞髓を發揮して來るならば、餘の一切の佛一切の諸經は各々生命活力を與へられて、各各その自分の價值を現はす事が出来るのである。言ひ換へるならば此の本門の魂魄たる壽量品の眞價值を現はして來ると、それに依つて他の一切經が生きて來るのである。日蓮宗では佛敎中無數に説かれて居る佛、即ち阿彌陀あり、大日あり、藥師あり、觀

人は開目抄に

發迹顯本(迹佛の眞相を明いて本佛の眞相を示す事一佛身觀を云ふ)せざれば實の一念三千(字實の眞相)も顯れず二乗作佛(人間の眞實事)も定まらず、根なし草の波の上に浮べるに似たり(根振がしつかり定)

と、説破されて、宗教の本質としての『宇宙觀』『佛陀觀』『人身觀』の三つがさつかりと定つて來ない、と仰せられるのである。この三大問題が明瞭を缺くと云ふ事であれば、それは完全な宗教ではない、處が法華經は此の三大問題に對して尤も明快に解決を與へて居るので、この本質論に於ては大本敎も、キリスト敎も足許へも及ばぬものである。唯だ吾人は現代人が西洋の物質文化に眩惑して、この崇高儼然たる批判區別をする所まで頭が行つてゐない事を悲しむのである。

斯くの如くして一代佛敎に説かれて居る三世に十方に無數の佛の中に、其等を一貫して居る佛の有る

音あり、別も眞言の金剛界・胎藏界の兩部の曼陀羅などを見ると實に恐ろしい程の佛がある、がそれ等を一體如何に見て居るか云ふに、如來壽量品に汝等諦に聽け如來の秘密神通之力を、一切世間の天人及阿脩羅は皆今の釋迦牟尼佛は、釋氏の宮を出で(王宮を出で給)伽耶城を去ること遠からず道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり、然るに善男子、我實實に成佛してより已來無量無邊、百千萬億那由佉劫なり(那由佉劫とは時間なき事を言ひ)……我實實に成佛してより已來久遠なること斯の若し、但方便を以て衆生を教化す、……如來の演る所の經典は皆衆生を度脱せんが爲なり、或は己身を説き、或は他身を説き、或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す。

と、佛自ら御自身の眞實を明さる。これを『迹を聞いて本を顯すの文』と云ふ、此の文意を日蓮聖事を明して、即ち汎神論的佛身觀の思想を、根本的一佛の上に統一し歸着せしめ來つて、この思想から釋迦牟尼如來が體の根本佛にして、他の無數の諸佛は阿彌陀でも大日でも藥師でも、皆用の佛、迹佛なりと説き明された、是れ即ち相・絶二判より示されたる開迹顯本の大教義である。

諸經には始成正覺の旨を談じて三身相即無始の古佛を顯さず、本無今有の失あれば大日如來は有名無實なり、壽量品に此旨を顯す、釋尊は天の一月、諸佛菩薩は萬水に浮ぶ影なり。

——法華眞言勝劣抄——

開目鈔講話

(第十二講)

小林 一郎

この間は、法華經の初めの方に於ては、お釋迦様は八十歳まで教をお説きになつて御入滅になつたといふことになつて居りまして、佛が永遠の壽命を持つて居らつしやるといふことはまだハッキリ言つてない。すなはち『初成道の華嚴經の始成の文に同ず』で、華嚴經といふのは一番初めに説きになつた教であつて、それには佛は長い間の修行の結果始めて覺を聞いたといふことが言つてあるが、それと法華經の初めの方に言つてあることは殆ど違はな

それでこれは一つお互ひに考へて見なければならぬのでありますが、佛様は永遠の壽命を持つて居らつしやる。所謂法華經の壽量品に説き顯はされた『本佛』といふものは、遠い昔から遠い未來まで永遠に存在をして居らつしやる、斯ういふことは判つた。それからマア吾々人間も、何もこの身がなくなつたら、それで生命が終る譯ではないのだから、佛が永遠の壽命を持つて居らつしやるだけではない。吾々共もやはり永遠の生命を持つて居るのだといふことで、この永遠の生命を持つて居る私共が、永遠

の壽命を持つて居らつしやる佛様の教を聴くのだといふことが、所謂久遠の壽命といふことの意味なのであります。併ながらさういふことばかりを考へて居つては吾々の修行は出來ない。『ナニ五十年や百年で死ぬのではない、何時までも生きて居るのだ』といふことばかり考へて居れば、『何れその内信心したら宜からう』といふやうなことになるのであります。結局本當の修行は出來ないのであります。そこはむづかしい所でせう。急いでもいけないが、氣を許してもいけない譯であります。急いで今直ぐに覺を開かうと思ふのは無論無理だけれども、さればと言つて『永遠の命だから五十年や六十年はドツチでも宜い、この世で出來なければ次の世でやらう』といふやうな、ソナナ呑氣なことを考へて居たら、何百年経つても、何千年生きて居つても本當の覺は開けないでせう。だからこれは兩方大事です。永遠の生命があるといふことを知るのも大事だけれども、

併ながらこの世の壽命は五十年、六十年、七十年位しかないのだから、この間に於て兎に角佛に成ることの、土臺だけはシツカリと立て、置きたい、斯う思はなければならぬ譯であります。これは兩方考へなくてははいけないのであります。

それだから法華經の初めの方ではその意味を以て、お釋迦様は三十歳を過ぎるまで御修行になつて、それから覺をお開きになつたのだ。決して苦心努力しないでイキナリ佛の智慧を成就されたものではないのであつて、長い間の苦心努力の結果、教を説くべき智慧の力を具へるやうにおなりになつたのだ。斯ういふことを言つて居るのであります。又佛教を信仰する者もその通りである。『何れその内……』なんといふことを考へないで、短い年限の間でも魂を打込んでやつて、さうして兎に角自分達の永い命の覺悟は決めて置かなければならぬぞ、斯ういふことを教へられるのであります。何時でも私共は

せ給て、我始め道場に坐し樹を觀じて亦
經行す等云云。最第一の大不思議なり。

急いでもいけないが、怠けてもいけないので、急がず怠らず、一步々と自分達の修行の道を進んで行かうといふ心持を持たなければならぬ譯でありませう。その爲に或る時は壽命は無敵だといふことをお説きになつたり、或る時は一生懸命に修行しなければ逆もものにならぬぞといふこともお説きになるのであつて、どちらもこれは尊い教訓と言はなければならぬのであります。それでマア法華經の初めの方に於ては、佛の永遠の壽命といふことは仰しやらない。三十歳を過ぎるまで修行して、その結果覺をお開きになつたといふことが言つてある。

法華經の正宗略開三・廣開三の御時、唯佛與佛乃能究盡諸法實相等、世尊法久後等、正直捨方便等。多寶佛迹門八品を指て皆是眞實と證明せられしに、何事をおか隠すべきなれども、久遠壽量をば祕せさ

ところがお經が段々進んで行きますと、正宗即ち法華經の中心となつて居る部分に於ては「開三顯一」といふことが言つてある。此處には「略開三」「廣開三」とありますが、開三といふのは開三顯一のことで顯一といふ言葉を略しまして唯開三と言つたのであります、詳しく言へば「開三顯一」であります。それで「略」と「廣」といふのは、初めに大體を説かれて、それから後に尙ほ詳しく前に説かれたことを更に敷衍して説かれたものですから、それで略開三、廣開三と、あるのであります。要するに略といふのは先づ大體を説くこと、廣といふのはそれを詳しく説くこととあります。

調べてその性質を示すといふことです、此處にあるものを一々調べて本當の性質を知らせる、それが開です。それから「顯」といふのは、その色々な骨折が結局何に歸着するかといふ、その歸着點を示すのが顯です。これを宗教上のことと言ふと、大變に吾と縁が遠くなるやうですが、實際のお互ひの毎日の仕事に付て説明するのがやはり開と顯です。マア商賣をして居るとか、或は工場て仕事をして居る、役所で役を勤めて居る、學校で教師をして居るといふ人々が大勢あります。何の爲めの商賣だらうか、何の爲めの仕事だらうか、何しに役所に勤めて居るだらう、何しに教育して居るのだらうといふ、その本當の意味を細かく調べてといふことが

「開」です。これをしなければつまらない。唯行掛りて、商人の家に生れたから商賣人だ。役人の子供に生れたから役人だ。自分は女に生れたから家の内の仕事をして居るのだ……といふやうな、行掛りに

執られた生き方では、何しに生きて居るか、本當の意味は判らないでせう。だから開といつて、それを開いて調べなければならぬ。一體自分達の毎日の仕事は何の爲に役に立つたのだ、何しに斯うやつて忙しいことを毎日やつて居るのだらうといふことを細かに調べます。それが開です。役人が役所に勤めたり、兵隊が教練をしたり、商人が商賣をしたり、女の人が家の内の仕事をしたりするといふやうなことは結局何の爲めか。結局はこの娑婆世界といふ苦し、嫌やな世の中を段々變へて行つて、淨土、即ち佛様の居らつしやる極樂淨土のやうなものにしようといふ、この爲にお役に立つのだ、斯ういふのが

「顯」であります。「お前は一體何しに生きて居るのか」と人に聞かれた時に、その返事が出来ないのでは心細い譯であります。大體は若い時はソナナことを考へないで、學校に入る時には「上の級に進みたい」と思ふ、段々に

上の級になつて行けば『卒業したい』と思ふ。卒業すれば『何か職業が欲しい』と思ふ。ソナナことでやつて居るのだが、その内に三十になり、四十になり、五十になつて、段々先が短くなつて来ると、『一體何しに斯うやつて生きて居たのか譯が判らぬ』といふのが、マア大部分の人であります。若い時には『一つ成功して立派な生活をしよう』とか『大いに出世をして孝やかな生活をしよう』とか思ふのだけれども、中々世の中は複雑だから思ふ通りに行かない、その内に先が短くなつて、『どうも若い時に考へた通りには行かないナ、どうしよう』どうしようと言つたつて、これからどうもなりはしない。『けれど、俺一人ではないのだ、世間には同じ仲間の方が多いのだ』といふやうなことで、マア縁に自ら慰めて、さうして世の中は思ふにまかせないのが當り前だ、ソナナニ自分の思ふ通りに行くものではない。それを自分の思ふ通りに行かうと思ふのは若い時の

夢だ、夢を見て居てはいけない。思ふにまかせない中を通つて行くのが人生だといふやうなことを考へて、『俺も大分世の中を通つて来て、この頃悟つたヨ』斯う言ふ人があります。ナーニ悟つたのでは無い。實はくたびれてしまつたのです。大概の人はそれでお終ひになつてしまふ。若い時は、色々な理想や空想や色々なことを描いて、それが半分も三分の一も實現されない間に四十、五十、六十になつて、『マア仕方がないや、くたびれたと言つては見つともないから、悟つたと言つて置かう』それでお終ひになる。それではいけない。だから『開顯』をやらなければならぬ。

そこで自分達が世の中に生きて居るのは何の爲めだ。その根本は何だ。その根本は法華經の全體を通じての思想でありまして、『娑婆即寂光土』これでせう。娑婆といふのは吾々の生きて居る苦勞の多い、面倒の多い世の中。寂光土といふのは靜かにして

光に満ちた場所、即ち佛様の居らつしやる所でありませんが、この娑婆世界と佛様の居らつしやる所と、マルデ懸け隔てたものと思ふのがいけない。『即』といふのは幾度も申すやうに離れないといふ意味であります。この娑婆世界を離れずして、吾々の毎日の仕事をして居る間に少しでも世の中を良くして、少しでも世の中を明るく気分の良いものにして、結局は佛の住んで居る極樂浄土を茲に實現しよう、その爲にお役に立つのだ。吾々が商賣をして居るのもそれなんだ、役所に勤めるのもそれなんだ、家の内で子供を育てたりするのも結局はそれである。自分達の骨折りが、この娑婆世界を寂光土、すなはち極樂浄土に變へるといふことの爲に幾らかでもお役に立つならば洵に結構だといふ、そこに自分の安心を置かなければならぬでせう。これが所謂『開顯』です。開くといふことと顯はすといふことであります。

ところがさういふことが終局の理想でありますけれども、どうも吾々は凡夫であつて迷ひが多いものですから、日常の事ばかりを考へて居たのでは、さういふことに想ひ到らない間に一生が終つてしまふでせう。そこでさういふ大事な覺を聞く順序として三つの教が説かれるといふのが、それが今までも屢々ありました『聲聞乘』『緣覺乘』『菩薩乘』といふ所謂『三乘』であります。これは今までも度々申しましたが、先づ以て世の中に執はれる心持をなぐすことが根本だ。世間に對して自分の慾望が甚だ強くして、うまい物を食ひたい、綺麗な物を着たい、大きい家に住みたい、人よりも尊敬されたい、他の人よりも上に立ちたい……ソナナことばかりを考へて居たのでは、世間に對する要求が主になつてしまつて、世の中を極樂浄土にしようなどといふソナナ大きな事を考へる暇なしに一生経つてしまふから、それではいけないので、兎に角小さい慾望を抑

へることを主にしようといふので、聲聞乘、緣覺乘といふ二つが説かれる。「聲聞」といふのは屢々申すやうに、耳に教を聽いて世の中に執はれない心持をつくること。「緣覺」といふのは唯教を聽くだけでなく、緣に依つて覺るといふのでありますから、自分達の毎日見たり聞いたりする事柄と思ひ合せて、他處に向つて要求ばかりするのをつまらないと思ふ。これはマア覺り方の違ひでありますから、要するに聲聞、緣覺といふのは、世の中に求めるといふ慾望中心の生活を離れる爲めの教だ、斯う考へて宜い譯であります。人間が皆慾望を中心にして生きて居たのでは、自分の慾望は限りなく増長して来る。その慾望を満たすべき所の世の中の物は皆限りがあるのでありますから、限り無き慾望を持つて限り有る世の中に立つて居れば、それは無論良いことばかりはありはしない。始終不平の絶え間はない、煩悶苦悶の絶え間はないのでありますから、そこを離れよ

事に心が惹かれて居るから、さういふことに自分の精力が消耗されてしまふので、自分の力が善い事に使はれないのです。だから「彼奴は何も世の中に役に立たぬ奴だ」と言はれるのであるが、その人にしては相當にやはり動いて居る、朝から晩まで寝て居る譯ではない。唯その骨折りがつまらない事に使はれて居る。自分の小さい慾望を満たすことにはばかり力が使はれて、その力が消耗してしまふものだから、大きい事に力を盡すことが出来ない。

私は自分の教へて居る學生などに、よく言ふのですが、力の節約をすることを考へなければいかぬ。あれにもこれにも心を配つて居たら、結局何をして宜いか判らなくなつてしまふ。善い事、大事な事に力を打込まうといふことを心掛けて、つまらない事に心を惹かれるのは出来るだけ止めて行かなければならぬのであります。どうもこの頃は世の中に出來事が多くて、新聞などにも色々な事故があるから、

うといふ爲に聲聞乘、緣覺乘を説かれた。

ところがさういふやうに世の中に對する慾望が一段なくなつて行きますと、今度は所謂「菩薩」の境界、自分が世の中に存在するのは自分の爲めだけではない、一切の人の幸福を進める爲めである。一切の人の生活を意義あらしむる爲めであるといふことに氣付いて来る。人間といふものは決して何もしないでデットして居るのが好きではないのです。身と心は共に動いて居るものでありますから、何かしたいのです。マア私などは餘り忙しくて、始終方々引張り廻されて喋べらされるから、偶には半日位黙つて居たいと思ふけれども、「一週間黙つて居ろ」と言はれたら逆も堪へられるものではない。マア飯は一度ぐらゐ食はんでも宜いから喋べりたいといふことになるでせう。人間デットして動かんで居るといふことはチツトモ嬉しくない。相當に動きたいといふことは人間の本性であります、ところがつまらない

兎角ソナナことに心が惹かれて、「此の間大森で三人殺しがあつた、品川で四人殺しがあつた、あれは中捕まらぬがどうしたのだらう」ソナナことを考へる。ナニニ自分は三人殺し四人殺しの親類でも何でも無いけれども、ソナナ下らないことを考へて居ると、それで頭は一杯になつてしまふ。「一體人生の意味はどういふ意味だらう。自分達は社會の一人としてどうしたら宜いか」といふやうなことに頭が向かなくなる。だから聲聞、緣覺といふ、世の中に執はれない心持をつくることも必要であります。世の中に執はれない心持になりますと、つまり頭に餘裕が出来るから、その自分の力を何に使はうか。それは自分一身の爲ではなく、世の爲、人の爲に、大勢の人の幸福を増すやうに、大勢の人の苦悶や悩みを除く爲にこの力を使ひたい、斯うなつて来る。これが所謂「菩薩」であります。これは人間は決して不精ではないのでありますから、身も心も動きた

い、動きたいのでありますから、つまらない事に身の力、心の力を使はないやうにしますれば、世の爲め、一切の人の爲に力を用ひるやうになるのであります。これが『菩薩乘』で、さういふことを教へるのが菩薩の教であります。

それで聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の三つですが、その三つは結局何に歸着するかといふと、この三つが一つの『佛乘』といふものに歸着する。佛といふのは申すまでもなく絶大の智慧を具へ、涯もないところの慈悲心を具へて居らつしやる方でありますが、さういふやうになれる。だん／＼所謂菩薩の修行を積んで行けば、佛の境界にも到達が出来る。又自分が佛の境界に到達が出来るばかりではない。さういふ心持を以て世の中の人を引張つて行けば、世の中の今凡夫のやうに見える人でも、一歩々々と進んで佛の境界に行くことが出来るだらう。己を佛にし人を佛にする、自ら教はれ人を教ふといふ、この

根本の事が大事だから、その爲に色々な修行をするのだ、世の中が無常だと言ふのは、無常で止まるのではない、世の中のつまらない出来事は無常ナンだから、ソナナ事に心を惹かれなくてモット善い事、モット根本の事を考へるといふことの爲に、世の中の無常といふことも説かれるのである。要するに自分が佛になり人が佛になるといふ、皆が佛様に近くなりさへすれば、娑婆世界のやうなコンナ浅ましい世の中が、一歩々々と極樂淨土の長閑な状態に近づくのでありますから、これを根本にしようといふのが所謂『開三顯一』であります。聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘といふ三つのものの性質を明にして、己も佛になり人も佛になるといふ一つの佛乘に歸着せしむる、斯ういふことであります。

は非常に大事であるけれども、世の中の事でも大事だ。前に申すやうに、自分達の毎日生きて居るのは何の爲めだ。そのことを『開』といつて詳しく調べ、さうして『顯』即ち一つに歸せしめる。一切の人間を幸福にする爲に役に立つのだ、國家社會を進歩發展させる爲に役に立つのだといふことに歸着せしめれば宜しいのであります。これが開顯といふことであります。さういふやうな意味のことを法華經の初めには、だん／＼と、順を追うて説いて行かれる。初めは大體を説くから『略開三』、それから後に至つて詳しく説かれるから『廣開三』さういふやうに教を説きになる。結局さういふ教といふものは、一切の人間を凡夫の境界から段々と離れしめて、佛様御自身と同じやうな境界にまで歸着せしめようといふお考から説かれるのである。

それで佛と佛とのみが本當に一切のものの性質を究め盡すのだ、これは方便品にある言葉であります。それで佛でなければ物事の本當の性質が解らぬといふのは、お前達はつまらない奴だからお前達には判らないゾといふことではない。皆、佛と成るべき本性を持つて居るのでありますから、人間はドンナつまらない人間だつて、自分一人で生きて居れば宜いと思ふ人はありはしない。親子であれば親子も互ひに親しみ合ふ、夫婦であれば夫婦も互ひに頼り合ふ、友達であれば友達同士も互ひに助け合ふといふのは必ずしも佛教を學ばないでも知つて居る。即ち小さい自己を捨てるといふのは人間の本性でありますから、その本性を十分に發揮して参りますれば、一歩一歩と佛の境界に近づいて行く譯でせう。だからお經の中に於て佛は特別だと仰しやるのは、佛とお前達と離れて居るといふことではない。今のお前達ではつまらないけれども、一生懸命に信心して段々と心の智慧が開かれて、大きな慈悲心を具へるやうになれば、凡夫とはマルデ違つた佛といふものにな

れるのだ、そこまで續けて行くのだ、斯ういふことです。その爲に佛は特別だといふことを言つて居られる。佛が凡夫と違ふといふことを言はれるのは、凡夫をして失望せしむる爲ではない、奮發させる爲めだ。お前達奮發すれば佛になれるのだのに、その奮發が足りない爲に何時までも凡夫の生活をして、「彼奴は金が儲かつた、こつちは損をした」「彼奴が先に行つた、後から行つた俺は轉んで泥だらけになつちやつた……」ソナナ下らないことばかりやつて一生生涯すのは無駄ではないか。もう一つ奮發しろ、お前達には佛に成る本性があるから、大いに奮つて佛に成らうといふ大決心をしなければならぬゾといふことを教へられる爲に、佛に成つて初めて總てのものの本性が解るゾ、斯ういふことを言はれるのであります。だからその教の本當の意味を辨へなければならぬ譯であります。

さういふやうな譯で法華經は二十八品であります

ず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまへり。是より已來始めて四十餘年を過ぎたり。世尊云何ぞ此少時に於て大に佛事を作したまへる等云云。

ところがだん／＼進んで行つて涌出品に至つて、地涌の菩薩といふ地面の底から大變に徳のすぐれた菩薩が現れて來られたといふことがありまして、その地涌の菩薩が現れた時に於て、初めて久遠の本佛といふ永久の佛を知るべき機會がそこに開かれた譯であります。その地面から現はれて來た菩薩をお釋迦様が御説明になつて、是等のものは今新にこゝに出て來ただけけれども、この頃自分が教へたのではない、ズット前から自分が教へて居つたのだ。自分は覺を聞いてから三十年や四十年の間、教を説いて居るのではない、遠い昔から教を説いて居るのだ、

二四
が、初めの十四品の中に於ても、大體吾々が佛に成る爲に奮發心を持たなければならぬといふことを言はれて居るけれども、また／＼初めの十四品に於ては久遠壽量といふことは言はれない。これはモット深入りして言ふことであります。それでやはり初めの方では「我始め道場に坐し樹を觀じて亦經行す」といふやうなことを言つて居らつしやる。お釋迦様は佛陀伽耶の道場で以て修行して、菩薩樹の下で色色心を練り智を磨くことをやつて結局覺られたのだ。斯う言つて居らつしやる。これはマア不思議な事のやうに思ふ。

されば彌勒菩薩、涌出品に四十餘年の未見今見の大菩薩を、佛、爾して乃ち之を教化して初めて道心を發さしむ等と説かせ給しを疑て云く、如來太子たりし時、釋の宮を出てて伽耶城を去ること遠から

斯ういふことを仰しやる。そこで他の者が疑を懐いて、自分達の目の前で言へば、お釋迦様は三十餘りて覺をお開きになつたのであつて、それから五十年近くの間、教をお説きになつたのだが、そのお釋迦様が「ナーニこの頃説き始めたのではない、遠い昔から教を説いたのであつて、その教を説いた結果として非常に徳のすぐれた菩薩が澤山出て來たのだ」斯う仰しやるのでありますから、これに對しては疑を懐かなければならぬ譯であります。

それで此處に書いてある疑が起つた。彌勒菩薩一人が疑つたのであります。彌勒菩薩が大勢の人を代表致しまして、自分達の疑問に付て質問を致しました。どうも不思議である、お釋迦様は太子で居らつしやつて、それから世の中の問題を解決しようといふので、「釋の宮」即ちお釋迦様のお父さんは釋迦族でありますから、その釋迦族であるお父様の御殿を出て、それから伽耶城といふ所から遠くな

いとこの道場、即ち菩提樹の下にある所でありま
す、此處で御修行になつた。その六年の修行が終つ
て、阿耨多羅三藐三菩提、即ち佛様の智慧を成就さ
れたといふことである。それから世の中に出て教を
お説きになつたのだから、お覺りになつてからこの
方四十年餘りである。その四十年餘り教をお説きに
なつたお釋迦様が、新しく出た菩薩を指し示して、
これは四十年、五十年ではない、ズット前から教へ
たのだ、斯う仰しやつて居るが、これは目の前の事
實とは一致しないではありませんか、これを如何解
釋すべきであるかといふことを彌勒菩薩が御尋ね申
上げた。

教主釋尊此等の疑を晴さんが爲に、壽量
品を説かんとして爾前・述門のき、を舉
て云く、一切世間の天人及び阿脩羅は、
皆今の釋迦牟尼佛、釋氏の宮を出てて伽

耶城を去ること遠からず、道場に坐して
阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと謂へ
り等云云。正しく此疑を答て云く、然
るに善男子、我實に成佛してより已來、
無量無邊百千萬億那由佉劫なり等云云。

教主釋尊すなはちお釋迦様は、この疑を晴さん
爲に初めて壽量品といふものをお説きになるのであ
りますが、その壽量品をお説きになるに先だつて、
『爾前、述門』すなはち法華經以前、或は法華經の
前半だけで覺つたその皆の心持を一通りお舉げにな
つた『き』といふのは聽いて覺つたといふ意味で
す。教を受けてマア大體皆はこの位のことか解つた
らうといふ、そこをお説きになつた。今まで自分の
教へた所で皆に解つた程度では、一切世間の天人及
び阿脩羅といふものは、今の釋迦牟尼佛は釋氏の宮
を出て、淨飯王といふ王様の御殿を出て、それから

六年の間修行を續けて、伽耶城を去ること遠から
ず、菩提樹の下に坐つて、そこでシツカリ考へてか
ら覺を得たものだ、斯う思つて居る。ところがさう
ではない、實は善男子、自分は昔から佛であるの
だ。斯う仰しやつてあるのであります。此に至つて
初めて本佛といふものが現れて來るのでありま
す。

本佛のことは、前に法華經に付てのお話の時に、
自分の考を一通り申上げましたが、今こゝに此の
問題が出て來ましたから、佛様といふものを一體ど
う見るか、吾々が佛様といふものをどういふ風に解
釋するかといふことに就て、一通り纏めて申上げま
せう。

私共が佛様といふことを初めに知るのには、佛
の教を聽いて知るのです。自分達は凡夫でありまし
て、色々迷ひが多かつたり苦みが多かつたりするも
のですから、これは自分達の考ではどうしてもこ

んな苦しい人生を離れることは出來まいと思つて居
る。そこに佛の教といふものが與へられて、その教
を學ぶことに依つて心の迷ひを除き、人生の苦悶を
離れることが出来るのでありますから、私共が佛様
といふものを知るのには、吾々を教へて下さる佛様、
吾々を救つて下さる佛様、これを一番初めに吾々は
氣が付くのであります。それが『應身佛』です。應
身佛といふのは佛の慈悲です、慈悲といふ方面から
佛様を見たとき、それが應身佛であります。すなはち
慈悲の固まり、お釋迦様はそれなのであります。一
切の人間の苦悶を除いて、一切の人間の迷ひを除い
てやりたいと思つて世の中に出て教をお説きになり
ましたから、これは慈悲の固まりであります。さう
してそれは『應身』である、應ずるといふのは、一
切の人の望みに應ずる『何とかして人生の意義ある
やうにしたい、何とかして苦悶を除きたい、迷ひを
離れたい、それには何か欲しいナ』斯う要求して居

る。その要求に應じて世の中に出て教をお説きになりますから、これを應身佛と言ひます。これが一番先に判るのです。極く普通に佛様といふのはさういふ心持でせう。佛様といへば自分達を救つて下さる方、自分達の迷ひを除いて下さる方と思ひます、これが應身佛といふことです。即ち慈悲の化身、慈悲の固まりとして佛様を仰ぎ見るのであります。

ところがモウ少し深入りして考へますと、佛様が私共を教へて、私共を救つて下さるといふことは、私共の毎日の生活を徹底的に知つて居らつしやる。どうして迷つて居るか、どうして苦んで居るかといふことが本當に解らなければ救ふことも出来ず、教へることも出来ない。佛の教が吾々の心持に深くしみ込んで、吾々が煩悶、苦惱を除いて人生の本當の意義を知るといふことは、佛様の方が吾々の心の奥の奥まで見透して居らつしやるからさういふ教が與へられる譯であります。これはどうも私共お經を

讀んで見て實に恐入つてしまふ、何時でも皆さんに話して居ることですが、どうしてこんなに自分達のことがよく佛様に解るかナアと思ふ。私共毎日何かの經を讀んで居ます、お經を讀む度に、どうも自分のことばかり言はれて居るやうな氣がする。三千年の昔お説きになつたことが、正しく今のこのお前の心に斯う云ふ迷ひがあるではないか、お前の心にこんな間違があるではないかと仰しやる。その御言葉は三千年昔仰しやつたのであるが、三千年後の人の心にヒシ／＼と思ひ當る。何か私のことばかりを佛様はよく調べて居らつしやつて、私に意見を言ふ爲に教をお説きになつたやうな氣がする。皆さうです、自分一人ではない、本當に魂を打込んで佛の教を學んで見ますと皆同じです。自分の爲の教だ自分の爲の戒めだ、自分に對して覺醒を促して下さつたのだ、斯う思ふ。それ程に佛の教が私共に適切なので、その適切な教をどうしてお與へになるか

と言へば、それは佛様が廣大無邊な智慧を具へて居らつしやるからだ、斯う思ふのであります。慈悲の働きは智慧から出る。佛様が總てのものの眞實の相を照し見る力を持つて居らつしやるから、その智慧に依つて奥の奥まで見透して、皆に適切な教を與へて下さるので、斯う言ふのであります。その智慧はどうして出来るかといふと、一朝一夕に出来たのではない。佛様が永い間御修行なされて、難行苦行の數を重ねて智慧をお具へになつたのでありますから、その智慧を具へた佛様のことを「報身佛」と申します。「報」といふのは「むくい」といふ意味で、つまり結果です。永い間難行苦行をして、永い間修行なされた、その結果としてそれ程の智慧を具へるやうになつたのだ。決して努力しないで唯、イキナリ覺を開くといふことではない。

これに付ては又私共が特に有難いと思ひますのは、佛教以外の教ではこの報身佛といふ考が非常

に稀薄なのであります。マア例へば耶蘇教です。耶蘇教も實に良い教であります、耶蘇はイスマエルの一つの部落の大王の息子で、三十歳近くまでは親の手助けをして居た。その大王をして居た青年が、自分は神に依つて此の世に送られたのである、自分は神の子であるといふ自覺を得て、さうして世の中に出て教を説いて、あのやうな勢力を造つたのであります。その大王の息子がどうして神に依つて送られたといふ自覺を得たか、その間の心の變化は説いては居ない。新約聖書を讀んでも舊約聖書を讀んでも、只の大王の息子が神の子だといふ自覺を得るまでの心の變化といふものは何處に説いてあるか、説いてない。だから判らない、マアどうかして不思議なことに、只の大王の息子が三十を過ぎて神の子だといふ自覺を得たのださうだ、それだけのことで、その心の移り行きが判らないのであります。それから又マホメット教の開祖のマホメットといふ人

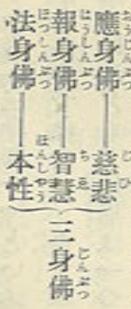
がある。これはアラビヤの羊飼をして居つて、後に或る金持の家の支那人などをして居つて、それからその金持の家の養子になつた人ですが、さういふ極めて俗な生活をして居つた人が、四十歳頃から、我は神に依つて送られたる豫言者であると言つて、世の中に出て教を説き始めたのだが、これも判らなぬ。ソナナ俗な生活をして居つた人が、どうして神に依つて送られたる豫言者であるといふ自覺を得たか、その心の變化に付てはマホメット自身は何も説明して居ない。唯自分が靜かに考へてさういふ自覺を得た、斯ういふだけの話であります。それから儒教の方で言つても、孔子は洵に懇切に吾々を教へられて、「十有五にして學に志し、三十にして立つ」と言つて、十五歳で初めて人間の道を學ばうと思つて、三十歳にして立つといふのは、自分で志を立て、自分の學んだ事を世の中の人に教へて世の中の人を良くしてやりたいといふ決心をした、斯う言

つて居られる。併し十五にして學に志してから、三十にして立つまでの間に、自分の心にどういふ變化が起つたか、どういふ問題が心に起つたかといふことに付ては一言も説明して居ない。唯十五にして學に志し、三十にして立つ、これだけの話であります。ところが釋迦様だけはこれを説いて居らつしや。即ち自分が出家してから後に色々と研究をして、色々の問題を考へて難行苦行の數を重ねて結局覺つたのだといふ譯で、人を救はうと思ひ立つてから、人を救ふ力を具へるまでの間の研究苦心、その難行苦行の數々を、少しも包むことなくお示しになつて居らつしやるのです。そこが佛教の特色であります、これは他の宗教にはありません。私は決して自分が佛教を信するからといつて、佛教に身負する譯ではありませんが、世界の有らゆる宗教をお調べになつて見ても同じことです。皆佛教以外の宗教

を弘める人は、イキナリ悟つたといふやうなことで教を弘めて居るのです。悟るまでの道行きは一つも打明けて居ません。お釋迦様だけはそこを實によく打明けて居らつしやる。斯ういふ問題が心にあつた、この問題を解決する爲に、これだけの決心をした、これだけの修行をして、これだけの難行苦行を重ねたそれから覺つたのだといふことを打明けて教へて居らつしやるのでありますから、本當に有難いのであります。それで應身佛も有難いが、報身佛も有難いのである。難行苦行の數を重ねて、結局智慧を成就されたといふことを考へますと、何とも言へない尊さを感ずる譯であります。

併ながら又考へて見るのに、修行して覺つたといつても、覺るべき本性がなければ覺れないでせう。無いものが有るやうにはならない、無から有は生じない。永い間修行をして覺つたといふのは、修行しない前から、修行したら伸びさうな種が、覺るべ

き種が、その人自身にあつたからでせう。何も無いものなら幾ら修行しても覺れる譯がありません。茲に草花の種子があるなら、その種子を地面に植ゑて、これに水を掛けて、肥料をやつて、日の光に照せば、芽が出て葉が出て花が咲くが、何も種子がない唯泥の上に、幾ら水を掛け肥料をやつても何も出て來ない。だから無いものから有るものは出て來ません。それでありますから智慧を成就するといふことの根本は、その修行をする前に、お釋迦様その方に、修行すれば佛に成れるといふ、本來の性質が具はつて居らつしやつたのだらう。斯ういふことを考へなければならぬのであります。即ち本性、佛となるべき本來の性質は初めから具はつて居つたのだ、これが「法身佛」であります。そこで「三身佛」といふことになるのであります。



吾々の眼に映ずる所ではこの順序です。教をお與へ下さる御慈悲の佛様、これが一番先に解る。その御慈悲の働きは、すぐれた智慧を具へて居らつしやる爲なのだが、その智慧は御修行の結局御成就になつたのだから、永い間修行を積んで智慧を具へた佛様、これがその次に解る。それから何故修行をして智慧を具へるやうになつたかといへば、初めからその尊い性質を具へて居る、その具へて居る本性を段々と磨き上げたのだ、斯ういふことで法身佛、本體としての佛が解る譯であります。これは吾々の方の目に着く順序でありますが、佛様御自身となればこの逆の順序になる、本来尊い性質を具へて居るから、それを修行して智慧を成就して、その智慧に依つて一切の人を救ふ慈悲の働きをする、斯ういふことになりませう。それで「三身佛」といふことを考へる。併ながら三種の佛様がある譯ではありません。一つの佛様が居つてさういふことをなさるのであり

ない、乳を呑んで腹が膨れたら氣持が好いだらうとか、ソナナことを考へて居る譯ではありません、自然に子供であれば母の膝の上つて乳房を探つて行くといふ本性を有つて居る、それが所謂佛性でありませう、法身であります。人間は銘々が小さき自己に執はれないで、親になつては子を愛しむ、子となつては親に懐く、夫婦となつてはお互ひに愛し合ひ、友となつては互ひに助け合ふといふことは、道も教も聽かない内から人間の本性として具はつて居るのであります。さういふ點から見ると、人々は皆佛と成るべき種を有つて居る、その本性は有つて居る。斯ういふことが言へる。その本性がなければ、幾ら教を與へられても、その教といふものは消えてしまふ、幾ら燐寸を摺つても、燃え付く物がなければ火は出来ません。ドンナ尊い教を與へられても、その教を受取るだけの本性が吾々になければその教は役に立たない。ところが吾々には本性がある、だから

ますから「三身即一」といふことを言ふ。三つの佛様があるのではない。吾々は三つの點から佛様を仰ぎ見るけれども、結局は一つの佛様なのだ、斯ういふ意味であります。

そこで釋迦様が斯ういふことを説き明かされた後に、お前達もその通りであるゾと仰しやつた。それは法華經の中にある「我が如く等しくして異なること無からしめん」何も自分だけ特別なものではない。お前達を皆自分と同じやうに、所謂三身を具へた佛としてやりたいと思つて、この世の中に出て教を説いたのだ。斯う仰しやる。さう考へて見ると、吾々も本来佛と成るべき性質を有つて居る。それは先に申したやうに、何も道も教も知らない者でも親が子を生めば、親は自分の苦勞を忘れて子供を可愛がるといふことを知つて居る。子供が智慧分別がない時から、母親の膝の上によち上つて乳房を握つて舐ぶるといふことを知つて居る。これは何も判ら

吾々には本来佛と成るべき性質があるのだ、斯ういふことが考へられる。その佛と、成るべき本質のある吾々が佛の教を學んで、段々修行して行けば、その修行の結果智慧を具へるやうにもなれるのだし、その智慧を具へて居れば、世の中の一切の人のお役に立ち、一切の人を救ふといふ慈悲の力も具へるやうになれる。斯う考へて來ると、お釋迦様だけが三身を具へて居らつしやるのではない。吾々も本来法身佛、報身佛、應身佛、三身の佛となるべき本は持つて居るのだ。また吾々は修行が出来ない、信心が足りないから、佛様と吾々とは離れて居るけれども、努めて已まなければそこまで行けるのだ、斯ういふことになる。お釋迦様も三身即一の佛様だが、吾々も努めて已まなければ總て佛様と近いものになれるのだ、斯う思ふでせう。そのことを梵網經の中に是有體に仰しやつて

「我は是れ已に成ぜる佛なり、汝は是れ當に成

すべき佛なり

とある。自分は段々修行を積んで難行苦行の数を重ねてモウ佛になつて居る。お前達はこれから修行して、これから苦心努力して佛と成るべきものだ、斯ういふのであります。これはお釋迦様御自身で仰しやつて居るから間違ない、お釋迦様がさう仰しやつて居る、お釋迦様御自身は已に成せる佛だ、汝等は當に成すべき佛だ、これから佛になるべきものだ、佛の未製品だ。佛様はモウ既製品で、スツカリ出来上つて居る、吾々は佛の未製品だ。今は凡夫だけれども、段々修行して苦心して行けば、譬て佛の境界に到達出来るものだといふことを、お釋迦様は打明けて居らつしやるのであります。

そこで問題がモウ一步進むのです。どうして吾々にさういふ佛に成るやうな性質が具つて居るのだらうか、又どうしてこの吾々の佛性を段々育てる爲に、お釋迦様といふ尊い方が世の中に出て教をお説

うか、斯う考へた時に、それは天地萬有の總てを統一して居らつしやる唯一つの無限の力を持つて居る佛様がある爲ではないか、それが『本佛』です。根本の佛様が一つある、その佛様の力が現れて總てのものになつた、その佛様の力が絶えず發展して居るから、世の中の總てのものがその所に安んじて居るのだ。さうすると一面から言ふと本佛の存在するところが、私共が皆佛に成る性質を具へるといふ本にもなる。若しさういふ大きな力がなかつたら、私共は獸のやうに生れて、唯草を食つて、木の實を食つて、その儘夢のやうに消えるのかも知れませんが、有難いことにさういふ佛様がその根本にあつて、その力の中に吾々は生れて來たから、吾々は佛性を具へて居る。佛と同じやうな性質を具へて行くことが出来るのだ。吾々の佛に成る性質の根本を考へたら、この天地の間に唯一つある佛様のお力の現れだ。斯う考へなければならんのではないか。而もこ

き下すつたのだらうか、これは偶然のこととは思へない。偶々どうかした拍子で佛様が出て來たのだといふ、ソナナ淺はかなことを考へる譯には行かないのである。又お釋迦様がこの世の中に御出現になつたことに付て、吾々は何にも代へられない有難さを感ずるけれども、その佛様が居らつしやるだけか有難いのではない。その佛様の教を聽いてこれをよく理解して、これをよく信ずるやうな性質が自分に具はつて居るといふことに付て、心から感謝しなければならん。佛様だけが有難いのではない、吾々がさういふ性質を有つて、佛様の教が解るやうに生れて來たといふことが心から有難い譯でせう。兩方に對して感謝しなければならぬでせう。それでこの問題が根本に入るのであります。如何なる譯で吾々はソナナ佛になるやうな性質を具へて居るのだらうか。又どういふ譯で吾々のさういふ性質を伸ばす爲に、お釋迦様といふものがこの世に現れて居らつしやつたのだら

の佛性だけではいかんから、又その本佛が片方に現れて、所謂教を説く佛様となつた、お釋迦様といふものが出て來た。だから吾々が佛に成る本質を具へて居るのも本佛のお蔭だし、又吾々の心の迷ひを除いて、吾々を教へ導く爲に出て來たお釋迦様が出て居らつしやつたといふことも本佛の大きなお力だ。それはお釋迦様といふ人間の身を取つて世の中に出た方は、或る年月経てば教を説き終つて衆生教化の爲めに御入滅を示されたお方だ。根本の唯一つの佛様があつて、それが釋迦牟尼佛といふものになり、人間の身を取つてこの世に現れて吾々に有難い教をお説き下さる。又その根本の佛様の性質が自ら吾々に賦與されて、吾々はお釋迦様の教を聽いてこれを理解し、これを信じ、これを實行するところの本性を具へてこの世に生れた、斯うなる譯であります。この根本の佛様を説き現はすといふことがなければ、迹佛としてのお釋迦様の教に絶對の力は具

はらない。この天地の間に、宇宙の間に一つきりない佛様の力が、お釋迦様となつて現れたのだと思ふから、このお釋迦様の教に心から歸依する心持になる。又この佛となる性質が吾々にも感與されて佛性といふものが具つてあると思ふから、この佛性を育て、お釋迦様の教に歸依することに限りなき喜びを感ずる、限りなき満足を感ずる、だからこの根本の佛様を捉へなければ信心はいく加減のものになつてしまふ。全力を打込むといふことにならない。

そこで此の關係は、本佛といふ根本の佛様が、形を現はしている／＼な佛様におなりになつたと考へられるから、その佛様はお釋迦様でもあれば、阿彌陀様でも、大日如來でも、藥師如來でもあるべき筈だが、この本佛の現れた佛様と同じに見てはいけない。何故なら娑婆世界に居る私共を教ふ爲に、特に本佛が釋迦牟尼佛といふ姿を取つて、この娑婆世界に現れて吾々に教をお説きになつたのだから、同じ

す。學問としてはそれで宜いでせう、併し實際吾々の信仰を勵む時には、唯天地の間に一つの本佛があるといふことを考へるだけでは、自分はどうしても善くなりません、どうしても釋迦牟尼佛として現れて下さつたその教を信じて、吾々の心を改めて、自分の行ひを磨いて行くのでなければ、吾々の持つて居る佛性は光を發することは出来ません。だから釋迦牟尼佛を離れて本佛を考へるといふことは、この娑婆世界に生れた吾々としては斷じて出来ないのです。隨て法身佛が貴くて應身佛が賤しいといふやうな説明は、吾々法華經を信ずる者としては承認出来ません。經典に依つてはソナナ議論をしてあるのがあります、法身佛が根本だ、應身佛はつまらなものである、斯ういふ議論をして居る人があるけれども、法華經を信ずる吾々としては、ソナナことは信じられない。應身佛である釋迦牟尼佛が直ちに、根本の佛であるといふことでなければならぬ。何故

現れた佛といつても、釋迦牟尼佛と吾々とは特別の關係を有つて居る、離るべからざる關係を持つて居る。この關係であります、これをいゝ加減にして置いて、お釋迦様の娑婆世界に現れて教をお説きになつた御恩を忘れてしまつて、「何でも根本の佛様さへ捉まへれば宜い……」これでは空論になつてしまふ、一種の哲學になつてしまふ。そこが宗教と哲學の違いでせう。時々世の中にはさういふ議論をする人がある。「ナーニ釋迦は八十かそこらで死んでしまつたのだ。あれは假に現れたものである、根本の佛様が大事だ、その本の佛様さへ信じさへすれば宜い」と言ふけれども、ソナナものではありません。この本佛が釋迦牟尼佛となつて現れて、そのお釋迦牟尼佛の教に依つて吾々の持つて居る佛性が開發される、それを通らないでイキナリ本佛には行かれない。此處が大事な所であります、唯根本の佛様が一つある、それで總ての解決が付くといふのは哲學で

なら、娑婆世界に現れて教をお説きになつた方といふのは、お釋迦様より外にない。この娑婆世界に現れて、吾々一切衆生と共に住んで、共に悩んで、共に苦んで、而して吾々に教を與へて下さつたお釋迦様を描いて、イキナリ根本の一つの佛様を考へるといふことは、それは空論になつてしまふ、本當の信仰でなくなる。此處の所はどうぞ間違へないやうにありたいと思ひます。日蓮上人は始終そのことを言つて居られる、お釋迦様を離れてはいかん、お釋迦様を離れて佛様を考へることは出来ない。それはその筈でせう、娑婆世界に出て來て教をお説きになつた人は、お釋迦様以外にはないのでありますから、お釋迦様の教を信じ、これに歸依することに依つてお釋迦様となつて現れた本佛に歸依することに出来る、斯ういふやうになつて行く譯であります。それが法華經の壽量品にハツキリ言はれてある。我實に成佛してより已來無量無邊の年月を経て居る

といふのは、本佛たる我が釋迦牟尼佛となつて現れたのであつて、本佛と透佛とは續きだぞといふことを言つて居る、その所をシツカリ捉へることが、法華經の信仰の上に於ては重要であります。若しそれが捉まらないうで、唯「お釋迦様は世の中に出て八十歳まで教を説いて世の中をお教ひになつて、これで佛の教が終るのだ」と思ふと、「それでは又これから暫く経つたら、モウ少し氣の利いた佛様が出て来て、モウちつと氣の利いた教を説きはしないか」といふつまらない考が起さる。お釋迦様が本佛の現れだ、吾々の折角具へて居る佛性を發揮すべき根本の佛様が釋迦牟尼佛となつて現れた、だから是れ以上上の教はないぞと信じなければならぬ。といつて又このお釋迦様といふ娑婆世界にある佛様の尊さを知らなければ、空論になつてしまふ。何の爲に信するか、その根據が解らない。それをスツカリ合理的に、よく吾々の心に滲みるやうに説かれた所に、法

華經の壽量品の尊さがあるのであります。これは前に法華經の壽量品のお話の時にも申し上げましたが、よく此處の所は捉へなければいけないのであります。ウツカリすると信仰が空になつたり、ウツカリするとお釋迦様の教が絶對性を失つて、「マア良い教だけれども、後になつたら又善い教が出て来るだらう」といふので、グラ／＼した信仰になるのであります。その所はシツカリと土臺を捉へて置くことが必要なのであります。

その事をお釋迦様がこゝに言つて居られる。我は遠い昔から色々な菩薩を教化したなどと言つたが、その歸着する所は、根本の佛様は一つである。壽量品に行きまして初めて本佛といふ根本の佛様が現れて、その根本の唯一の佛様がお釋迦様となつてこの娑婆世界に姿をお現はしになつたに過ぎないといふことも解る。さうすると釋迦牟尼佛とならない前に色々な佛となつて色々な教が説かれたといふこと

も、この本佛の色々に現れた姿だ、斯ういふことになる。だから法華經を読んで見ると、前の世に斯ういふ佛があつた、モウ一つ前の世に斯ういふ佛があつた、その佛の説いたことは、釋迦牟尼佛の教と同じだといふことが言つてある。根本は一つだ、それが色々になつて現れて、さうして一番終ひに釋迦牟尼佛となつて現れて、この娑婆世界に身を現はして吾々の爲に教を説かれた。だからその教は皆同じだ、根本は一つだ、根本が一つだからその教は同じだ。根本が方々にあるならその教は違ひませうけれども、その根本が一つでありますから、有らゆる佛の教は皆歸する所同じだ。それ故に吾々が釋迦牟尼佛といふ一つの佛様に歸依して、その教を信じさへすれば、十方の世界の數限りない佛様に歸依すると同じことになる。「我則ち歡喜す。諸佛も亦然なり」と法華經の中にある。お前達が本當に信心して呉ればお釋迦様は喜ぶ、自分だけでなく色々な佛様も

喜ぶ、即ち根本が一つでありますから、ドンナ佛様でもその心持に變りはない。一つの佛様の喜ぶ所は皆の佛様が喜ぶ。一つの佛様のお説きになる事は他の佛様も皆賛成される。斯ういふことになる。それで吾々も安心してお釋迦様の教に歸依することが出来る。その一つの教に歸依すれば、總ての佛の教に歸依すると同じだ。このお釋迦様がお褒め下さるやうな行ひならげ、どれ程の佛様が世の中にあつても皆褒めて下さるのだ。それはさうでせう。根本が一つでありますから……。これをシツカリ捉へて行きまして、初めて私共の信仰生活が確立することに相成るのであります。この事は今までにも申したことであります。今こゝに「本佛」のことが出て参りましたから、重ねてこのことを申しました。何といつても吾々の信仰の中心は此處に置かなければならん、これはどうしても考へなければならぬ、他の事柄は枝葉の問題であります。この根本の問題をシ

ツカリと考へて行かなければ吾々の信仰は動搖します。信仰がグラ／＼しては仕様がありませんから、

繰返して申上げた譯であります。

(第十二講了)

豫 告

觀心本尊鈔開講

宗教信仰上最も肝要なる事は、所謂「本尊觀」である。本尊意識の不透明なる時に、種々の弊害百出する。日蓮上人の觀心本尊鈔は開目鈔と不離重要な御書なると同時に難解のものとして、學者間にも議論多々ある。今回 小林一郎先生、特にその蘊蓄を傾倒され斯道の爲め毎週火曜日 晚當會館に於て 講義される事は、自他の歡悅措く能はざる處、此際信誦共に進んで來聽されんことをお薦めする。

日蓮主義 統一會館

電話牛込五三三六番

日支事變と宗教運動

礮 部 滿 事

今次の事變は、支那が東亞の平和と、日支親善の深義を辨へず、我が誠意を曲解し、暴狀を敢てしたるが爲めに、これを膺懲悔悟せしむべく、我國の躍起となり、それは進んで人類に一大福音を與へんとするものであると一般に解されて居る。

抑も支那共和國は、大正の始め、孫文が三民主義即ち民族主義、民権主義及び民生主義を鼓吹して起つたもので、夫は申す迄もなく四億の民衆を合同して統一國家を形成すること、並に自國內に從來侵入して國權を毀損しつゝある諸外國の特權は一切之を掃蕩し、かくて漢民族による支那の統治を完成せんことを目標としたもので、これは彼れが北米に教養

されたからリンコルンの燒直しであつた。其後世界大戰を経て、ソ聯の巧妙な「帝國主義排撃」弱少民族覺醒の聲が支那青年達を魅了し、漸次共產分子が勢力を得て來たので、現在の蔣介石にしてもが、三民主義の信徒であり、又共產主義者に對しても忠實な同志である。殊に昨年末の西安事件後は厭應なしに共產軍討伐から一變して、民族革命・民主主義革命に全力を傾けざるを得なくなつた。

愆る彼の國民政策と、我が一君萬民家族制度の思想とは、到底相容れざるものである。四千年の老帝國と雖も、一朝聖賢の大道を履み違へ、之を捨て去つた時に、既に亡國となつて居たのであつた。今之

を善導し、啓發せんとするも、彼等の頑迷固陋、果して耳をかす餘裕ありや否である。彼等は曰く、自分共は舊き歴史を有せる中華の民である。日本の如きは昔より我文化を學べる後輩である。若少國が生意氣であると蔑んで事々物々その尊大自矜の態度を示すことは恰かも、田舎の舊家没落の狀態に比すべきであるまいか。

いかに系圖の正しい家柄に生れても、徒衣飽食で無教育な暗愚な者は、乞食浮浪の徒と何等擇ぶ所はない。人間の尊貴貧賤は一に教化の有無に依つて定まるであらう。「魚にして水を離れば死す、人にして道を離れば死す」と大公望は述べて居るが、國家に於ても同様である。教法の尊重せらるゝ國家は興隆し、道義の無い國家は遂に滅亡せざるを得ぬ。省みて我國に於て事變勃發前の國狀はどうであつたか、果して上下一致し、聖賢の道を履行して居たか、各々黨を組んで相剋の醜態を演じた事はなかつ

たか、今次の事變の一因を慎重に國民は反省し、大懺悔すべきであるまいか。

今更事新しくいふ迄もないが、我國は單なる尙武の國ではあるまい、軍國ではない、霸道に建てる筈では勿論ないのである。教育勅語を拜するに「我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」と仰せられ、億兆一心に聖旨を奉體して、克く忠孝の美德を發揮する。これ我が國體の精華とするところである。斯の大道を國民は、至尊と俱に拳拳服膺して成其の功徳を一如せしむる道義の國家である。世界唯一の徳治國である。正法を以て建てる神國である、正義の國家である。七百年の昔、二十年の研鑽を果んで奮然起つた護法勤王の聖日蓮の立正安國の叫は、目下極めて重要な意義を有するものではないか。

今や國を舉げて精神總動員を叫ぶに到つたのは、この事變が單なる武力丈けて解決は出来ない。經濟

力丈けでも足りない、外交も重大性を齎すが、根本に於て、國民思想の上に最後の金鍵が宿されて居るからではないか。先日も東京日日の「三角點」欄に、職工三郎の名を以て召集に對する不満を述べて居た。出す新聞も新聞であるが、無教育、非常識の職工と思へば氣の毒でもある。併しかゝる思想が一部にありとすることは實に寒心の極みである。彼は職工であつたが故に、まだ若干の月收が家族に與へらるゝのである。其日暮しの商人であつて出征した後御國の爲であると三度の食事を缺いて猶不平一つこぼさず、幼兒を抱へて行商する可憐の婦人もある。そこに平素培はれた宗教心の有無に依つて、かく迄も人格の差はあるものかと痛感した次第である。毎日の新聞にも銃後の美談が續々と掲げられて誠に頼母しく思ふが、一面には情けなく思ふ。往昔支那から誇り顔に廿四孝の美談を齎らした時、我國からは

廿四不孝の者を擧げた有名な話のある様に、日本國は昔から忠孝の國民で堅められてゐる、今更それ等を賞美する迄もなく、教化が徹底してゐれば、それは普通のことなのである。普通の事が美談となる迄に國民性の墮落した事を、祖先にも詫び申上げねばなるまい。畢竟宗教を無視せる佛罰ともいふべきであらう。

盡忠報國、舉國一致は至極結構であると同時にそれは抽象論であつてはならぬ、教化宣傳の机上論であつてはならぬ。そこに忠君愛國の傳統精神は何に依つて培養されて來たのか。顧みて護持正法の大事を想ふのである。長い歴史を経て知らず／＼の間に國民性となつて居る佛教の偉大な感化力を憶ふのである。志士は教法のいかに大切であるかを深思すべきである。その法とは何であるか、申す迄もなく思想を導き、理想を教へ、信念を決定せしむる所のもの、即ち個人を教へ、社會を導き、國家を啓發する

ものを法といふのである、故に國家は此の法の爲めに益々隆昌に趣き、法は又國家に依つて庇護さるるものである。之を法國冥合といはれて居る。今の日支事變に懲するも、我國は東亞の安定を確保して共存共榮といふ立派な大道の爲めに奮起されたことが明示されて居る。即ち國の爲め道の爲めに貴い犠牲を拂ひつつあるのである。是れ天業恢弘天下光宅の實現第一歩たること申す迄もない。かかる自覺に起つて働く時、大きな不可思議の力を生ずる、所謂天祐又は感應といふことが發る。佛神は常に法の爲の故に而も之を衛護さるゝのである。

戰地に於ける皇軍の威力は、神人共に威奮措かざる次第、之れ偏へに御稜威の然らしむる所とは申せ、又我將士の忠勇義烈の大和魂に依るは勿論であるが、更に立ち入れれば、その指導幹部の勇猛果敢にして、常に自ら陣頭に立ち卒先身を挺して敵陣に突撃し、部下を激勵せるに因る。この消息を教家は何

て説くべきである。本多上人の恩師兒玉上人は、津山の假屋に於て秋宵行燈に對して説法されしと聞く。昔曇無讖は、山中巨岩に峙して經を講じたではないか、眞に正法を惜まん者、此國を思ひ今や大決定信に燃え起つべきである。この機會にかの一貫三百のドンツク會式狂を改め、淫祠邪教を爆撃して、七百年前、立正安國の運動に終始された、日蓮立正大師をしのび、この非滅現滅の聖月に際して至心に懺悔と醒悟以て、其の遺命を謬らぬ様二陣三陣と賑起すべきである。

各各思ひ切り給へ、此身を法華經にかうるは右に金をかへ葉に米をかうるなり、佛滅後二千二百二十餘年が間、迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、兩岳、天台等、妙樂、傳教等だにもまだひろめ給はぬ法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始めに一國浮提にひろまらせ給ふべき瑞相に日蓮さきがけしたり、わたうども二陣三陣つゞきて迦葉、阿難にも勝ぐれ、天台、傳教にもこへよかし。

種種御振舞御書

と見てゐるか。銃後の宗教家は其の營む處、戰捷祈願、敵國降伏、戰歿者追悼、或は獻金運動、お守り獻納、時局講演等、中には出征軍人又は留守宅の慰問に勵んでゐる篤志の者もある。而も其の生命とする第一義の宗教運動は影をひそめて寂寥たるものではないか、概ね世間に引摺られてゐる顔が見ゆる。國民精神の統一を重視せる秋に當り、一天四海皆歸妙法を理想せる日蓮門下の僧俗は、此際何を夢見て居るのか、聽衆を集むるには時局ものとか、餘興を入れねば人は來ぬとせる彼等は宗教の尊嚴を何と考へてゐるのか、在家の名士を假りて之を利用せんとするは氣の毒な事と思ふ。かの戰場にあつて單騎千萬の敵軍に突進する部隊長を何と拜するか。凡そ宗教家は、軍人の戦線に立つ以上、平素から命懸けで第一線に立つべき者ではないか、殊に非常時に於て聽衆の有無は念慮すべきでない、唯その説く所の正邪を辨別し、屢々自己反省を促し、衆に怖れずし

汝早く信仰の寸心を改めて、速かに實乗の一善に歸せよ。然れば則ち三界は皆佛國なり、佛國其れ衰へんや。十方悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや。國に衰微なく土に破壊なくんば、身は是れ安全にして、心は是れ禪定ならん此詞此言信すべく、崇むべし。

立正安國論

立正安國の理想と日本精神

守屋貫教

今回の事變、その頃は北支事變といはれて政府が頻りとその不擴大の方針を聲明して居た頃、私は一回は東北地方、一回は東海、關西、山陽、九州地方へと旅行したのであります。その頃私が目撃し感激に打たれた事は、到る處に舉國一致の日本精神が遺憾なきまでに發揚された事でありました。私はかうした精神の顯現を二回程目撃して居ります。その第一回は明治廿七八年の日清戦争の時で、その頃政界は自由黨と改進黨とが鎗を削つて、その爲めに内閣が總辭職をした程の、政界の雲行の甚だ不穩なる時でありましたが、日清戦争といふ國家の重大事の前には、一切の行懸を一擲して舉國一致事に當つたのであります。その頃私は小學生位のものでありましたが、日清戦争を通して顯はれた日本精神の發揚を今尙眼前に浮べることが出来ます。第二回は明治卅七八年の日露戦争の時で、その當時の光景はさざ／＼しく腦底に残つて居ります。何しろ衆議院議長河野廣中が、奉答文に於て政府の稅政を彈劾す

る。その爲めに議會は直に解散となつた程の暗雲低迷の政狀でありました。それが日露戦争となると一切の紛争は跡方もなく消えて、政府も國民も全く水も漏らさぬ舉國一致、よく強敵露國と戦つて大勝を博したのであります。

舉國一致の日本精神の顯はれは、今度が第三回目であります。近衛内閣は國內の摩擦相剋を超越することを以てその使命とした内閣でありましたが、數年來政府と政黨、政黨と軍部との間に結ばれたる摩擦相剋、それが爲めに國民の間に及ぼす不安は、之を解消することが出来ませんでした。然るに一朝北支事變といふ國家の大事物發するに及んでは、それ等の摩擦相剋は一切雲散霧消して、政府も政黨も軍部も國民も全く一色の日本國民に立還つたのであります。

私の東北や九州方面の旅行に於て、到る處の停車場、到る處の沿道、老若男女が手に／＼國旗を振りかざして萬歳を叫ぶ聲は、天地をゆるがす程でした。町の人々は朝の九時頃から晩の十時頃まで、停車場に出て出征兵士を歡送します。汽車に乗ると、必ず二三の出征兵士が意氣軒昂既に敵を呑むやうな元氣にはちされて居ります。事件物發以來既に二ヶ月に垂んとするのであります。國民熱誠の意氣は益々募るばかりで、今尙毎日萬歳の聲は天地に充つる程であります。世界戦争に當りて英國國民は決して興奮せず平生通りに生活したとの事でありましたが、私は當面の國民の熱誠を興奮とは考へません。それは平生吾國民の奥底に潜んで居る日本精神の發揚と考へるものであります。

差當りこの日本精神の發揚が舉國一致の精神といふ言葉で表現されて居りますが、私はそんな形の上からいふべきものでない、人間が平生は何事もないがいざ一朝大事に出會ふとその根柢に潜んで居るまごころが顯はれ来るやうに、三千年來吾が國民に蓄積してある日本精神が堤防を決したやうに顯はれ来るのであると考へるのであります。それは日蓮聖人の詞を借りていへば、不惜身命の信を以て顯はれて來ます、異體同心の形を以て顯はれて來ます。

二

今から約七百年の昔、鎌倉幕府の執權北條時頼に獻上された日蓮聖人の立正安國論は、常に歴史的の文書と見るべきものでありません。聖人は永遠の相の下に日本國及び日本國民を認識して、この日本精神の上に立正安國論を捧げられたのであります。當時世間の狀勢を見ますと源平盛衰興亡の後を承けて戦亂の巷から脱することは出來ず、動もすれば戦雲を孕んだ有様でありました。加之聖人が開教立宗前後の十數年間は、大地震、暴風雨、疫病、飢饉等の天災地變が頻々として鎌倉の天地を襲うたのであります。それで國民の思想は佛教の末法思想に影響せられて、世界は滅亡するではないかといふ厭世悲觀が濃厚でありました。此世を穢土と厭ひ一筋に西方淨土を欣求する淨土教の隆盛はこの一面を語るものであります。

聖人の佛教は從來のそれとは頗る異なるものがありました。聖人は法華經の根本教に従つて動もすれば穢土とさらはれる此娑婆世界の當相に寂光淨土を認められました、また煩惱濁惡の此身に即して成佛を信ぜられたのであります。それで淨土教などのやうに、煩惱や罪業に溢れる此世を厭うて、西方淨土の往生を勤める代りに、この日本國の上に法華經の流布すべき因縁を發見し、この日本精神の上に不惜身命の信地を深く認識したのであります。當時の日本國民は戦争を以て虐げられ、天災地變を以てさいなまれ、末法思想でおびやかされたもの、言はゞ襟首をつかまれてこれでもか／＼と試煉にかけられたやうなものであります。そこに日本國民は他方の世界に逃避するか、不惜身命の信地に住するか、必ずその一つを選ぶべき運命に置かれたものであります。聖人は夙に日本國と日本國民との研究に於て徹底せるが故に、滔々たる念佛思想の勢にも拘はらず、この日本精神の不惜身命の信地をめぐけて立正安國論を植ゑられたものであります。

その不惜身命の信の御手本は、聖人自らがその一代の行動を以て示されて居ります。聖人は立正安國論を幕府に獻上した爲めに、また一代を通じて立正安國の猛烈なる宗教運動を爲された爲めに、弘長には伊豆の伊東に流罪にされ、文永には龍口の首の座に据ゑられ、同じく佐渡島に遠流せられ、所謂大難四ヶ度小難數を知らず等の種々の迫害に遭うて居られます。これ等の大難を通していつでも不惜身命の信を以て貫き通されたのであります。

當時と今日と時勢は必しも一ではありません。然しながら變らぬものは日本精神であります、一大國

難に直面して眞に日本精神を發揚せしむるものは、聖人の不惜身命のこの信であると信じます。それはまた日本精神の眞面目であると信じます。

三

立正安國論は聖人が當時の日本國及び日本國民に捧げられた實際的宗教運動であります。聖人の宗教は私共凡夫とは異つて永遠の相の下に國家及び國民を觀るものでありますから、その立正安國論には理想があります。即ち聖人の立正安國論は歴史的の愛國運動でなく永遠の宗教運動であります。それが爲めに聖人は伊豆の伊東に流され龍口の首の座に据ゑられ、佐渡島に流罪せらるゝ等山の如き波の如き宗教的迫害を受けて、その宗教的迫害の中から宗教的生活を開展し、以て法華經を日本國と日本國民との上に實現し、日本の柱、日本の眼目、日本の大船を以て自ら任じ、そのみか身延九ヶ年の未來永遠への生活を開展し、その宗教的自覺と宗教的反省とは世界人類にまで及び、最後に立正安國論の結論として、はた永遠に亘る立正安國論として本門戒壇の修行を立て、以て後の吾々へと遺されたのであります。

本門の戒壇とは日本國を法華經の靈地とする理想であり修行であります。日本國と日本精神と聖人の立正安國の運動とは三者具足して茲に國立戒壇は建立せらるべきであります、所謂王法佛法に冥し佛法王法に合するその時をいふのであります。そしてその靈國日本を中心として世界の法華經化、世界の立正安國論を期するのが、所謂一天四海皆歸妙法であります。

日本は今支那と戦ひつゝあります。支那と戦ふ事に依つて領土を侵略するものでない、最後は支那との親善を期するにある、依つて以て東洋の平和を確立するにあることは屢々聲明された通りであります。この立場に於て戦ひつゝある日本人の精神を世界の立正安國論を以て開顯することは、當面の日支事變が國家の重大事である如く、永遠の日本國に向つて最大の重要事であると考ふるものであります。現實の問題にのみ没頭するものは、妥協と不徹底とに陥り易い、之を永遠の立場からは正し指導するの常は常に宗教者の任務であります。

日本人が一億萬年の暗を破つて奮ひ起つたその日本精神に、不惜身命の信を點火すべきは、今正にその時であります。その不惜身命の日本精神の上にこそ、初めて世界の立正安國論は建立せらるべきであると信ずるものであります。

鎌倉の奥津城二つ

笹木欣爾

五二

極樂寺の生佛の良觀聖人、折紙をさし上げて上に訴へ、建長寺の道隆聖人は、
輿に乗つて奉行人にひさまつく——妙法尼御消息——

一、道隆和尚奥津城——建長寺。

建長寺の山門の直ぐ右手に、塔頭たる西來院の門がある。直々と伸びた十本ばかりの杉木立を背景にして、如何にも畫趣ゆたかである。その門柱の右には「本派専門道場」左には「臨濟錄提唱西來院」と大きな木札がかけてある。此の門を這入つて、爪先上りに少し行くと、こんどは左手に瀟洒な門があつて、「西來庵」と云ふ軒額が見出される。無用の者入るべからずの注意が出てゐるが、已に前にも來て若干勝手が判つてゐるので、玄關へ鳥渡聲をかけてか

まはず中へと進んだ。境内には、成程、建長寺としての坐禪堂がある。夏の日盛りのせいもあらうが、あたりは流石に静かなものである。正面には單層茅葺の昭堂がある。則ち建長寺の開山堂である。その昭堂わきの足元の至つて悪い急勾配の石段を、危く百二十七足登り詰めると、松の木にとりかこまれた丘腹の淨域へ導かれる。そこには、墓石が二基あるのみであるが、場所は二基を安置するに、廣きに過ぎず、狭きに失せず、墓石と面積との誠にほどよい釣合ひは、閑雅な環境と共に、詣づる者の心を思は

ず引きしめる。道隆和尚の奥津城である。二基の内、正面にあるのが道隆和尚、一段下にあるのが圓覺寺開山佛光禪師の墓なのである。

道隆和尚とは、日蓮門下にとつて忘れることの出來ない名である。建長寺としても、和尚が此の寺の開山なのであるから、寺として一番大事な人であるに相違ない。かゝる形勝の地を擇んで手篤く葬つてあるのも、宜なる哉である。前に書いた昭堂とは、この開山和尚のための堂なのである。

道隆和尚の墓の形式は無縫塔で、右面には一字も刻してない。塔全體に亘つて少しの破損もなく、古は完全に保たれて居り、昔むした幾百年の石齡は、永く久しい黙々たる兀坐をさながらに偲ばせて、所謂その昔鎌倉中の上下万民から佛の如く仰がれたと云ふ一代の禪僧にとつて、全くふさはしい墓なのである。

本來なら、私はこゝいらで想ひを一ト先づ鎌倉時

代の昔に返し、日蓮上人對道隆和尚の往來交渉などを述べ可きなのであらうが、そのことに關しては御書が何より明かに語つてゐるし、それに又、かゝる叙述の行き方は參拜紀行の定石を餘りにも踏みすぎで面白くないから、今は少し趣きを變へて、こゝには最近無縫塔に就いて發表された跡部直治氏の文章の内から、和尚の墓に關聯のある箇所を抄記借用することにした。文章は「佛教考古學講座」第十一卷掲載「無縫塔」に依るもので、引用文中括弧内の數字はその頁數である。餘事乍ら右は興味多き研究で、詳しくは同文を往見されたい。

我國に行はれた石造塔は、重層塔にあれ多寶塔——五輪塔——寶篋印塔何れの種類も、その本來に於て積善供養の所産として發達せし關係上、立塔の場所は必ずしも埜域に限ると云ふのではなく、寺社の境内は勿論、或は村落の路傍、山中、林下、海邊など到處に樹立されて遺存するが、本篇に述

べる無縫塔と稱する一類は、禪家の創案にかゝる墓所専用の純然たる葬塔にして、小数の例外を除き現存遺品の大部分が僧尼階級の墓塔に局限されてゐる特殊の存在である。尙又其の塔形が後世に至りて位牌の形式にも轉用され、所謂寶塔形位牌と呼ぶ新様式が出現せし如きも、他の石塔類には見られざる現象である。此の種塔形は禪宗の弘通によりて本邦に傳來し、大略鎌倉時代の後半頃から行はれたやうで、當初は勿論禪僧の墳にのみ立てられたのである。神奈川縣大船町宇山内建長寺の開山大覺禪師道隆の身塔は恐らくその先蹤であらう。(二頁二頁)

右の如くであるとする、道隆和尚の墓は無縫塔として中々由緒のあるものである。

……禪師(道隆和尚)の身塔は昭堂の後ろ嵩山にある。塔は地上に方三尺二寸、高一尺三寸五分の石築塔壇を造りて其の上に立塔し、總計五個の安山

岩より成り、塔高三尺六寸五分、權衡絶妙、手法

も極めて優秀、恐らく現存此の種遺品中の白眉であらう。……さて本塔の製作年代は、細部手法より察して禪師示寂後直ちに建塔されしものとは考

へられぬが、さりとて南北朝代には下らざるべく、恐らく正和前後の立塔ではなからうか。(一頁)

心あつて建長寺を訪れる人なら、誰でも和尚の墓へは是非詣りたいであらう。けれども、墓への道し

るべは何も出来てゐない。よし偶然にその奥津城へ至り得たにしても、墓石にはたゞの一字も刻してな

いから、これが和尚の墓と知られやう由もないのである。遺憾と云へば遺憾だが、鳥渡は人が來られな

い場所だけに、松籟に吹き浄められた埜域には、地上のそここゝに踏むのも心もとない苦などが生へて

ゐて、こゝは清韻に充ちた一乾坤をなしてゐるのである。

鎌倉驛から、強烈な太陽にチリ／＼照り付けられ

ながら歩いて來た私は、こゝに落ち付いて身心共に暑熱から本當に解放されたのであつた。

二、真觀和尚の奥津城——極樂寺

建長寺から極樂寺へ廻る。江の島電車の「極樂寺前」で下車すると、寺の山門がある。それを這入つて敷石傳ひに眞直に進むと、正面に寶形造りの粗末な本堂がある。脇には庫裡と、今一つお堂があるが、狭い境内にはこの他に何物もなく、良觀忍性律師が創建當時には七堂伽藍の完備はもとより、塔頭は四十九院を算し、二百七十有餘の堂塔堂を並べたと云ふ跡としては、餘りの變りやうにあとの言葉もつかないのである。小さな本堂を見るときもなしに脇から見ると、避暑客らしい都會人がゐて、廣くない堂内には椅子テーブルや小荷物等の類が相當持ち込まれてゐた。此の前にいつだかの冬來た時は、堂に上つて、極樂寺の古繪圖や、良觀上人の畫像木像等を見せて貰つたが、こんどは人もはいつてゐるし、

自分の氣もすゝまなかつたので、直ちに裏山の上人の墓へと急いだ。永い間一滴の雨もない上に、殘暑とは云へば毎日々々のカン／＼照りて、あたりそこいらは一面に白た／＼けて、一足毎にほこりが遠慮なく舞ひ上る。本堂から裏山に至る一二丁の間は畑であるが、大分住宅が点在してゐる。道はやがて杉の大木でかこまれた山ざわの一劃に行きづまるのである。

こゝには、中央に大きな五輪塔があつて、新しい揭示がでゝゐる。

忍性墓・忍性は極樂寺の開山にして、常に慈善公共の業に盡し、嘉元元年(紀元一九六三)八十七歳にして寂す。後醍醐天皇、菩薩號を賜ふ。

忍性とは、申すまでもなく良觀上人のことである。この五輪は高さ十五尺、大きいことも正に大きい。大ききよりも恰好の整ふてゐるのになうたれるのである。臺座から最上部の空輪に至るまで、一々の

石は皆申し分なく美事な釣合ひを保つて、安定感、重厚性、均整美等そなはらざるはない。殊に、腰の据りのよい地輪、その上にドツカリと落ち付いた水輪、水輪に被さる火輪は、斜線平行線、共に心地よい反りを打つて、地水二輪から来る重々しい感じを緩和してゐる。こゝの面白さは観る者の眼をあかさないのである。たゞ、蓮瓣の下の臺座が二重になつてゐるが、これは却つて一重にして置いた方がよかつたのではあるまいか。尙、墓石には少しのいたんだ所もない。

良觀上人の五輪の左脇に、日蓮門下にとつてこれ又忘れることの出来ない北條重時公の寶篋印塔がまつてある。塔身が不自然に短小である。道隆和尚の無縫塔、良觀上人の五輪塔と、見て來た眼には、墓としてこれは少々ぶざまなものである。葬つた當時には、どこか他の場所にあつたのを、後になつてこゝへ移す時、こんな姿になつて了つたのではない

かと考へられる。揭示がでゝゐる。

北條重時墓。重時は義時の子なり。職を辭して後、極樂寺を創して退居し、弘長元年（紀元一九二二）卒す。年六十四、常に和歌を善くし、念佛に歸依せり。

息よてゐる内に、いつか夕暮が迫つて來た。つくつく法師が鳴きかはしてゐる。人氣のない奥津城の静けさは、又一段である。秋已に立つて、今は句餘。私は今年初めての秋の氣配を、計らず良觀上人の墓の邊に感じたのである。

附記。八月の下旬、私は鎌倉へ行つて、久振りに建長寺と極樂寺とを訪れた。道隆良觀兩和尚の墓に詣でんためである。上記に於いて、日蓮上人對兩和尚に關して全く觸れなかつたのは、もの足りぬでもない。しかし、本文でも鳥渡云つた通り、それ等に就いては何よりも御書と云ふものがあるのである。これに依るのが一番たしかである。私

は前にも二三回兩和尚の墓に詣で、かね／＼兩者の墓が石造美術として大いに観るに足りるものだと思つて居り、今又訪れて益その感を強め得たのである。勿論、私に石造美術のたしかな審美眼があるかと云ふのではない。素人眼の俗談であるのかも

知れない。が、それ等の墓へ新しく詣でる方々のために、こんな意味で墓そのものを御覽なさるのも又一興であらうと思つて、何かの御參考までに、日蓮門下の古墳參拜記としては少々觀點の變つた此の小文を草した次第である。

お 笑 草

來る人を蟲が知らせる草の庵。
今頃は道隆良觀佛なり。

膽の大斗の如き月見かな。

禪宗の紅葉息子の天魔なり。

ドンツクの聲に祖師は目を見張り。

記事

本部 團報

震災記念 九月一日、忘るべからざる第十五周年がおとづれた。今や隣國が空襲をうけて焦土化されつゝある新聞の記事を見る毎に、かの大震災の跡を偲ぶのである。市民の平素訓練されざりし突發の事變に甚大なる犠牲を拂つたことに鑑み、最近は目標を防空において猛練習を続けらるゝことは至極結構の事と思ふ。火を見て消すことを忘れ、周章逃げ出すことは日頃その心がけを等閑に附せるが爲めで、大洋を航海せる船舶にあつては毎週一回、船内に於て必ず火災訓練を行ふことが普通となつてゐる。これは陸上に於ても、近頃のやうな大きな建築物又は工場あたりでは、是非繼續して訓練さるべきであらう。これを互の肉體の上に引當つる時に、平素宗教の信仰なき者は、イザ突發の凶變に遭遇したとなれば、最後は悲惨なものである。死生の間在つて泰然として事を處する人は、必ず精神修養を平素に於て積めるものである。

とは事實が説明して居る。

吾人はかゝる機会に於て、聖賢死者の靈位を心から弔ふと共に、一般市民への宗教信念を興ふべく一日の朝道博會を本部に開催した。各方面に於ても勿論此種の法要は修まるであらうが、果してそれが供養として徹底したものが否かは議論のある處である。即ち種々の形式を以て其の冥福を祈られるが、甚だしいのは救済主たるべき本尊なしに禮拜したり合掌してゐる珍量もある、形式はたとへば厳格であつても、それでは同向にならぬ位のことば、一般常識として辨へて頂きたいと此隅りに附記しておく。

龍口法難會 九月十二日はいふ迄もなく、日蓮聖人、大難中の大難である。御自身にも、小松原と龍口の口が、一番危険な生命問題に及ぶ法難であつたと仰せられてゐる程、最後の場面であつことが察せられる。

恰度日曜日に相當せるを以て午後二時から本部に於て、法蓮を張り、小西、和賀兩師を中心に當時を追憶しつゝ、讀經唱題された。終つて直ちに禪部理事の簡單な挨拶があつて、本郷日當氏の「佛敎の競争觀」が懇説された。今の時、吾等佛敎徒はこの經典を引證しての

熱誠こめた氏の講話に對して有難く、共鳴禁じ得なかつた。小西日喜師は「護法護國の交響」と題して、大聖人がいかに護法の爲めに、又我國の爲めに一身を惜まず健闘されたかと、法國交合の眞諦を懇説された。横濱から中村清一氏も参加されたが、時間の關係上お話を拜聴出来なかつた事を残念に思つた。

法話後來會者一同へその往時を憶ふて、おはぎを供養して茶話會が催され、又一段と宗教の妙味を喫し、夕暮に散會した。

開目抄講話 本年は殘暑も相當厳しく、健康をそこねた方も一二あつたが、漸く九月中旬に入つて緩和された。「暑さ寒さも彼岸より」とは實にあらそへないものと思ふ。

十四日の第二火曜日から小林先生の講座は開かれた。數十回に亘り懇切に説述された開目抄といふ、残り少なくなつた、大聖人の留殘録として、この開目抄と如説修行抄は當に身を離さずにしたがひものである。而してこの次には有名な「觀心本尊抄」の講話が、かの御遺文講義で出版されたものより以上に、小林先生が其の至誠を盡めてお話し下さることになつてゐるから、これは是非來聽さるべきことを今からお薦めしておく。

福島支部報

於高岡 九月十四日午後一時より、禪部先生御指導の下に同校日蓮聖人信仰會員及び支部會員多數出席の上例会を開く。本日は妙法蓮華經卷第七中の不經品並びに神力品に關し御懇篤なる御法話を拜聴す。

於中村家 夜は七時より一般支部會員例会を開催、先生には「日支事變に際し日蓮聖人龍口法難を憶ふ」と題し、我國建國として振がす光り輝くは明敎を基とする道義ある所以なりと説かれ、延いて日蓮聖人龍口御難の御法話に及び、九時半有難きこの御講話を終る。引續き富支部秋季日蓮主義大講演會に關し打合せ等あり、十一時散會。

尙同夕は岩瀨少佐、中山喬司氏のお二人見え、一沫の寂しさあり。因みに中山氏は富市日銀支店より門司に榮轉され、岩瀨少佐は出征の爲座召され、本朝突然御出發なされたものである、特に本誌を通じて岩瀨部隊長の出征を祝し、併せて武運長久を御祈りする次第である。

編輯室より

◇ 彌々陛下親むべき秋となつた、神田邊を

一瞥すると、日支事變に關するものは出るが、他のもの疎に精神的ものは殆んど買手のない有様を心懸く思ふ。かゝる時こそ一層國民は心の修養に志すべきこそ大國民の態度であるまいか。

◇ 本多上人の聖訓摘要も追々完結に近づき、早くこれを袖了して、既刊の聖訓摘要と共に全御遺文の讀つた要義と致したならば、如何に求道の士女に歡迎さるゝかと思ふ。

ある人から、今頃統一誌上に毎月連載される本多上人の法話は、何か既刊の書物から採準してゐるのだらうと、獨斷的な問合せを受けたが、一寸お考へになるとさう思はるでしやう。何しろ第七期も皆んだ此頃毎號未だ繼續してゐる。宗門自らでさへも、何等上人の遺稿に就ては補切れないに、お前達がどうして得られやうかと考へるのは、或は當然といへるかも知れないが、そこに本多上人の深い意志のあつたことをよく胸に手をあてて考ふべきである。極端な者は、本多上人は晩年頭腦が狂つたので、同師會などをこしらへた、氣の毒だといふが、その人こそ氣の毒である、御生前に接近してゐなかつた。證據である。道念のないことを告白してゐるので

ある。かゝる消息は、先頃遙化された今成人人が、萬事理解されてゐた。兎も角本多上人の遺稿は、未だ〳〵本部には山積されてゐる。これも一には石川隆一氏の遠記のおかげである、「死せる孔明、生ける仲達を越せらす」といふことあるが、文化のたまものとして、寫眞あり、蓄音機あり、印刷ありといふことが幾だ貴く有難い事で感謝に堪へない。

本多上人の遺稿も、著書も、御精神も、御舍利と俱に本部にヒカ一であるから御安心ありたい。

◇ 龍木氏の「日蓮宗概観」は、初學者には實に有難い記事だと歡迎されてゐる。定めし靈前でアノ爆笑を示して居ることであらう

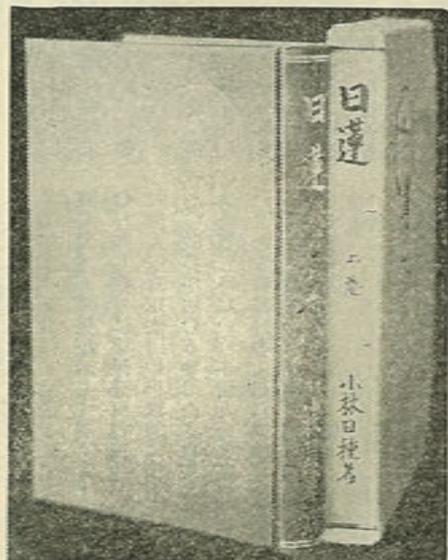
◇ 久し振りに守屋先生の玉篇が手にされた大聖人の立正安國の御理想に對して、異端異心の教界を眺む時、全く申譯のないことな洗滌禁じ得ない。不惜身命は護法の爲ではない、ある世俗的のものに向つて、所謂名よりも實をとるといつた者の多い場合に、肅然として第一義をかざして、靜かに三十棒を眞鍮で包んで、目の前におかれた心地がして慚愧に堪へない。お會式の月に一入感懐深いものがある。

題字	頭山 滿先生
題字	宮中顧問官 小笠原長生閣下
題字	海軍大將 山本英 輔閣下
題字	海軍中將 佐藤鐵太郎閣下 貴族院議員
口繪	著者所藏の日蓮聖人御眞筆
口繪	佛舍利を前にしたる著者肖像

小林日種師著 (吉田信二畫伯裝禎)

日蓮

上卷



自由人トシテ描カレタル聖日蓮ノ全貌ヲ見ヨ。執筆刊行トモニ海外ニ於ケル初メテノ企テ!

菊判—三百三十六頁
天金・クロス製の豪華版
挿繪—カッ卜四十餘
定價米金貳弗 送料二十四仙

布哇に於ける最大の日刊新聞たる布哇報知紙上に連載して好評を博したる本著は、愈よ新裝して出づ! 下巻は目下連載中にて終了を待つて直ちに出版の豫定

發行所 布哇マノルル市日布哇報知社
クイン街一二七番地

取次所 布哇マノルル市顯本山法華經寺
マアス街二七六七番地

名づけ、北方を微妙聲と名づく。是の四如來自然に師子座上に坐し、大光明を放ちたまふ。爾の時に信相菩薩、至心に佛を念じて是の思惟を作さく、釋迦如來は無量の功德あり、唯壽命に中り、心に疑惑を生ず。云何が 如來の壽命、是の如く方に八十年なる。爾の時に、四佛、正偏知を以て信相菩薩に告げたまはく、善男子よ、汝今應に 如來の壽命短促なるを思量すべからず。何を以ての故に、善男子よ我等 諸天・世人・魔衆・梵衆・沙門・婆羅門・人及び非人の能く如來の壽量を思量して其の齊限を知ること有るを見ず。唯、如來を除く。時に、四如來 將に 釋迦文佛所得の壽命を宣揚せんと欲す。

爾の時に、四佛、大衆の中に於て略して偈を以て喩へて 釋迦如來所得の壽量を説き、而も頌を作して曰く、

一切の諸水は 幾滴なるを知る可きも
能く釋尊の壽命を 數ふること有ること無し
諸の須彌山の 斤兩を知る可きも
能く釋尊の壽命を 量ること有ること無し
一切の大地の 塵數を知る可きも

能く釋尊の壽命を

算すること有ること無し

虚空の分界は

尙ほ邊を盡す可きも

能く釋尊の壽命を

計ること有ること無し

不可計劫

億百千萬

佛壽は是の如く

無量無邊なり

是の故に汝今

應に佛の無量の

壽命に於て而も

疑惑を生ずべからず。

爾の時に、信相菩薩摩訶薩、是の四佛、如來の壽命無量なることを宣説したまふを聞いて、深心に信解し、歡喜踊躍せり。是の如來壽量品を説く時、無量無邊阿僧祇の衆生、阿耨多羅三藐三菩提の心を發こせり。時に、四如來忽然として現ぜず。

懺悔品第三

爾の時に、信相菩薩、即ち其の夜に於て 夢に金鼓を見る。其狀殊大にして、其明普く照らす。一人の婆羅門に似たるもの有つて、袍べんを以て鼓を撃ち、大音聲を出だすを見る。

其の聲、懺悔の偈頌を演説す。時に、信相菩薩、夜を過ぎ旦あしたに至りて王舍城を出づ。如來に向ひて説く。

昨夜夢みる所

至心に憶持す

夢に金鼓を見るに

妙色晃耀として

其光り大に盛なり

明なること日に踰へたり。

讚歎品第四

爾の時に、佛、地神堅牢善女天に告げたまはく、過去に王あり、金龍尊と名づく。常に讚歎を以て去來現在の諸佛を讚歎したてまつる。

我今去來

現在十方の

諸佛を尊重し

敬禮し讚歎したてまつる

諸佛は清淨にして

微妙寂滅なり

色中の上色なり

金光照耀す

諸の聲中に於て

佛聲は最上なること

猶ほ大梵の

深遠雷音の如し。

空品第五

無量の餘經

已に廣く空を説く

是の故に此中に

略して解説せん

衆生は根鈍にして

智慧渺なし

廣く無量の空の義を

知ること能はず。

四天王品第六

爾の時に、毘沙門天王、提頭賴吒天王、毘留勒叉天王、毘留博叉天王、俱に座より起つて偏へに右肩を袒にし、右膝を地に著け胡跪合掌して、佛に白して言さく、世尊、是の金光明微妙經典は衆經の王にして、諸佛世尊の護念したまふ所なり。世尊、是の金光明微妙經典を若し大衆に在つて廣く宣説せん時、我等四王及び餘の眷屬、此の甘露無上の法味を聞きて、身力を増益し、心進勇銳して、諸の威徳を具せん。世尊、我等四王は、能く正法を

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	全	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		全	金貳圓九拾錢
眞理の基礎に樹つ佛敎の信仰		全	金拾五錢
法華經要品		全	金五拾錢
日生上人レコード(四面)		全	金參圓廿五錢
日蓮聖人		全	金拾錢
本尊意識に就て		全	金貳拾錢
釋尊の八相成道		全	金貳拾錢
法華經の心髓		全	金壹圓五拾錢
本多日生上人		全	金壹圓七拾錢
勳行作法		全	金拾錢
河合彰明著		全	金壹圓
皇道と日蓮主義		全	金壹圓

東京市小石川區音羽町六十七番
財團法人 統一出版部
東京東區九四二番

月刊「教」誌
申込所 東京市小石川區音羽町六丁目
振替口座東京一〇九四〇番
「教」發行所 金壹圓貳拾錢
送一年前共
送一ヶ月前共
定価一冊
金拾五厘

統一定價
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十二年九月廿七日 印刷納本
昭和十二年十月一日 發行
(第五百十一號)

不許複製
編輯人 磯部 滿 事
發行人 磯部 滿 事
東京市小石川區音羽町六十七番
印刷人 山田 英 二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
電話牛込六九六番

發行所 財團法人 統一團
東京市小石川區音羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

次 目

聖訓摘要……………	本多日生
文化史上より觀たる支那事變……………	井上哲次郎
開目鈔講話(第十三講)……………	小林一郎
理想的文化と法華經……………	磯部滿事
時事所感……………	金子光和
記事……………	
○本部關係	
大藏經要義續篇(其八)……………	本多日生
○附費誌料領收……………	

號月一十年二十四第

統

一

財人國統
團發行